東金市 玉崎神社裏横穴群

― 土砂災害防止委託埋蔵文化財調査報告書 ―

平成25年2月

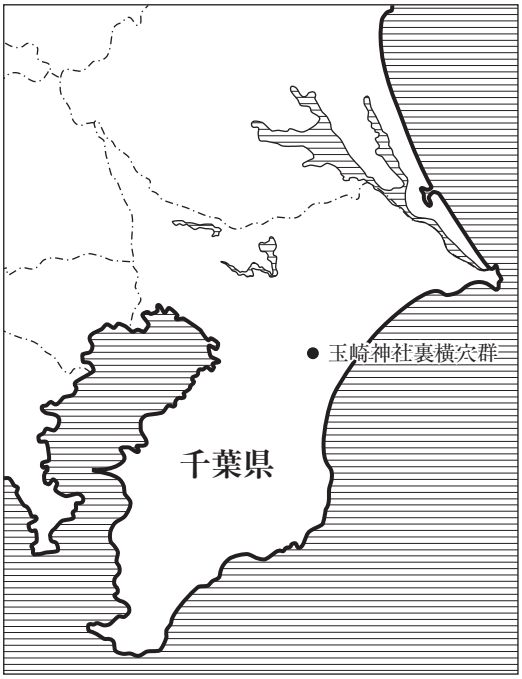
千　葉　県　県　土　整　備　部

公益財団法人　千葉県教育振興財団

東金市 玉崎神社裏横穴群

とうがねし　たまさきじんじゃうらよこあなぐん

— 土砂災害防止委託埋蔵文化財調査報告書 —



ST-002～004

ST-004～006

ST-002 出土遺物

序　　文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第698集として、田間急傾斜地の土砂災害防止事業に伴って実施した東金市玉崎神社裏横穴群の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、古墳時代終末期の横穴が検出され、完形の土器類や弓飾りが出土するなど、この地域の歴史を知るうえで多くの貴重な成果が得られています。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際しご指導、ご協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また発掘から整理までご苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成25年2月

公益財団法人千葉県教育振興財団
理事長　渡邉清秋

凡　　例

1　本書は、千葉県県土整備部山武土木事務所による田間急傾斜地災害防止事業に伴う埋蔵文化財の調査報告書である。

2　本書は、下記の遺跡を収録したものである。

　　玉崎神社裏横穴群　東金市田間 2214 － 6 ほか　（遺跡コード 213 － 028）

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県県土整備部山武土木事務所の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

4　調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者等は以下のとおりである。

調査研究部長	平成 23 年度　及川淳一
	平成 24 年度　関口達彦
調査事務所長（課長）	平成 23 年度　中央調査事務所長　白井久美子
	平成 24 年度　調査２課長　橋本勝雄
発掘調査期間	平成 23 年７月４日～　９月 26 日
	調査担当者　上席研究員　蔀 淳一
整理作業期間	平成 24 年８月１日～ 10 月 31 日
	整理担当者：上席文化財主事　黒沢 崇　　水洗注記～報告書刊行

5　本書の執筆は上席文化財主事　黒沢 崇が行った。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育振興部文化財課、東金市教育委員会、千葉県県土整備部山武土木事務所、井上哲朗ほか多くの方々からご指導、ご協力を得た。

7　本書の第１・３・４図で使用した地形図は下記のとおりである。

　　東金市発行　1：2,500　東金市地形図　其 20・28　昭和 58 年

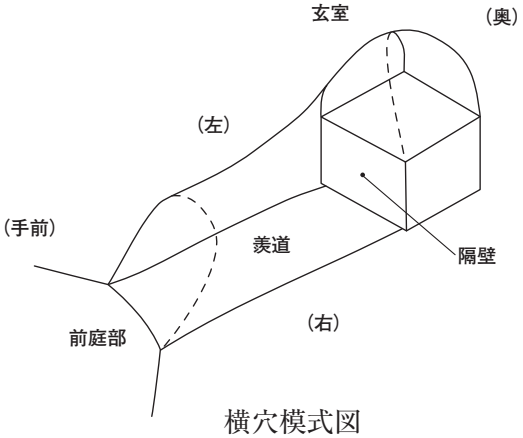
　　地図史料編纂会編　明治前期　関東平野地誌図集成「東金」

　　国土地理院発行　1：50,000　地形図「東金」（N1 － 54 － 19 － 11）平成２年

8　本書で使用した地図の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。

9　土器の観察表に記載した色調は『新版標準土色帖』に基づいている。

10　横穴の各部名称、図などの表現の凡例は以下のとおりである。須恵器実測図断面は黒塗りとした。



横穴模式図

目　　次

巻頭図版

序　文
凡　例
目　次

第１章　はじめに…… 1
　第１節　調査の概要…… 1
　　１　事業の経緯と経過…… 1
　　２　調査の方法…… 1
　第２節　遺跡の位置と周辺横穴…… 5
第２章　遺構と遺物…… 9
　第１節　遺　構…… 9
　第２節　遺　物……19
　第３節　工事立会……22
第３章　まとめ……23
抄　録……巻末

挿図目次

第１図　周辺地形図…… 2
第２図　調査対象横穴位置図…… 3
第３図　迅速図による周辺地形…… 4
第４図　周辺の横穴の分布…… 6
第５図　調査横穴の平面・立面分布…… 8
第６図　ST－001 ……10
第７図　ST－002 ……11
第８図　ST－003 ……13
第９図　ST－004 ……15
第10図　ST－005 ……17
第11図　ST－006 ……18
第12図　出土遺物……20
第13図　ST－007・008略測図 ……22
第14図　東上総地域の古墳と横穴……24
第15図　復元横穴平面・断面図……26
第16図　東上総地域の横穴変遷図……28

表 目 次

第１表　周辺の横穴一覧表…… 7
第２表　遺構一覧表…… 8
第３表　土器観察表……21
第４表　鉄製品計測表……21
第５表　銭貨計測表……21
第６表　横穴復元計測値とグラフ……26

図版目次

巻頭図版　ST－002～004
　　ST－004～006
　　ST－002出土遺物

図版１　遺跡周辺空中写真
図版２　横穴群遠景
　　調査区調査前
　　工事立会状況
　　発掘調査風景
図版３　ST－001
図版４　ST－002（1）
図版５　ST－002（2）
図版６　ST－003（1）
図版７　ST－003（2）
図版８　ST－004（1）
図版９　ST－004（2）
図版10　ST－005（1）
図版11　ST－005（2）
図版12　ST－005（3）
図版13　ST－006（1）
図版14　ST－006（2）
図版15　ST－006（3）
　　出土遺物

第１章　はじめに

第１節　調査の概要

１　事業の経緯と経過

千葉県県土整備部河川環境課では土砂災害予防計画に基づき、土砂災害の未然防止と被害の軽減を図るため危険箇所の実態を調査し、災害防止策を講じている。その中の急傾斜地崩壊対策として、急傾斜地崩壊危険区域を指定し、危険度の高い箇所から順次計画的に被害防止工事を実施している。玉崎神社裏横穴群の所在する東金市田間地区は平成 11 年１月に告示番号千第 33 号で急傾斜地崩壊危険区域指定地（4,108.92㎡）とされ、今回、急傾斜地土砂災害防止事業が実施されることとなった。

その事業の計画を受けて平成 21 年度に、山武地域整備センター（当時）より「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会へ提出された。千葉県教育委員会では現地踏査を行い、同年度に「玉崎神社裏横穴群」が事業地内の一部に所在する旨を回答した。この回答を受け、その取扱いについて関係機関による協議を重ねた結果、切土工事にて横穴が影響を受ける部分については、事業の性格上やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、千葉県教育振興財団文化財センターが発掘調査を行うこととなった。発掘調査成果として６基の横穴構造が明らかとなり、７世紀中葉～８世紀初頭を中心とする遺物が出土した。やや遺存は不良ながら横穴の構造変遷についての貴重な資料を記録保存することができた。

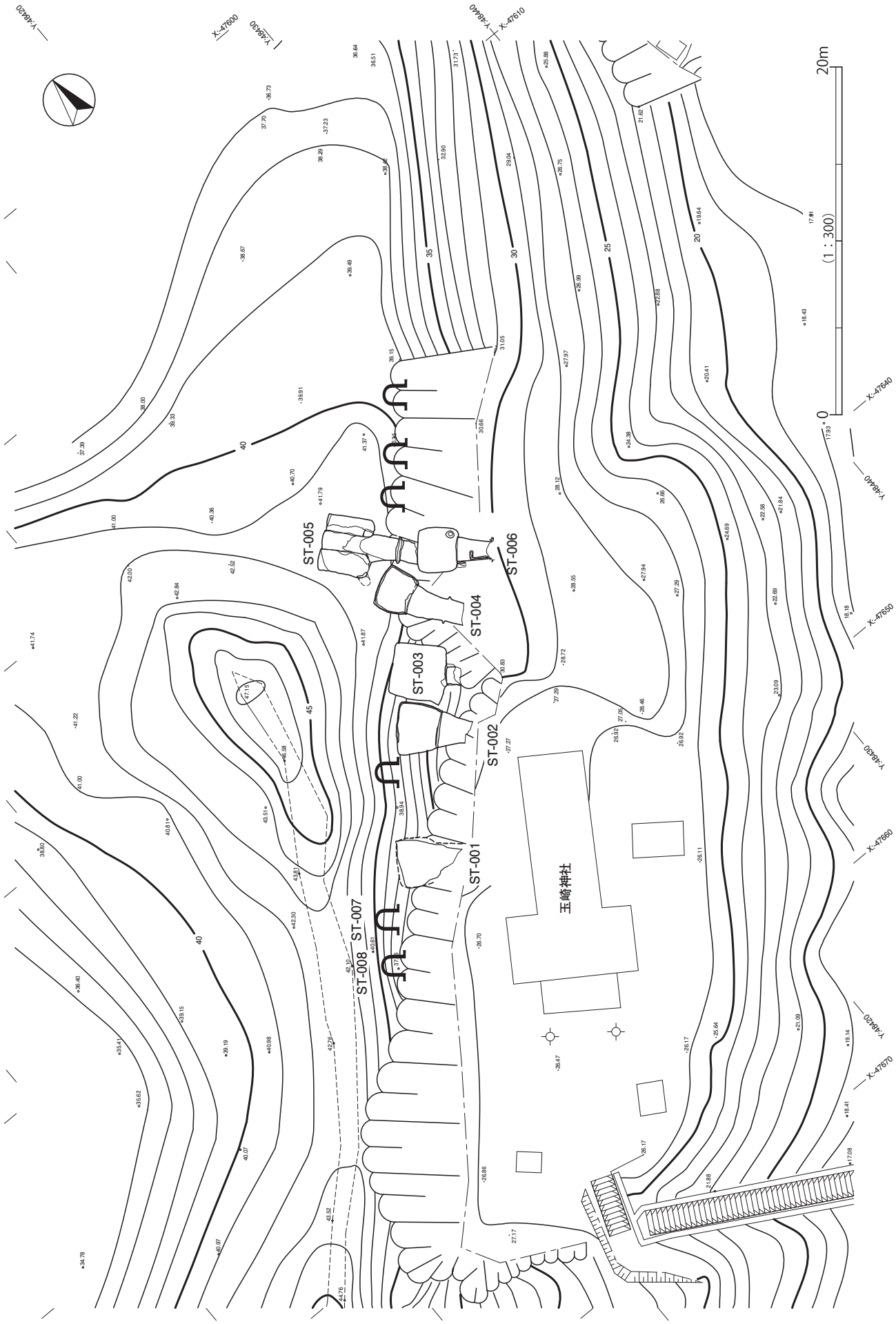
２　調査の方法

発掘調査　切土工事部分に相当する横穴は８基で、その内２基は立地上安全の確保が困難なため工事立会とされ、６基が発掘調査対象となった。調査にあたり発掘調査対象の横穴を南西から ST-001 ～ ST-006 と遺構番号を付し、現地調査の記録類から遺物注記にあたっても踏襲した。横穴のみが対象の発掘調査のため、グリッド№は設定せずに、各横穴の主軸に沿って座標をもった杭を測量委託により打設した。それを基準として土層断面図・遺物出土状況図を通常通り平板等を使用して作成した。それ以外の平面・立面図等については、横穴天井崩落の危険性が高いため現地における調査時間の短縮、効率的な図面を作成する観点から電子平板測量を委託実施した。表土除去は重機等の搬入は地形上困難であるため、人力で横穴周辺にかぎり必要最小限の範囲とした。調査終盤に大雨で、ST-006 すぐ東脇の木が地滑りで倒れた部分から新規横穴が開口したが、切土工事範囲外であったため発掘調査は実施していない。

発掘調査はまず調査前写真を撮影後、横穴毎に玄室と羨道部の中心を通る主軸を設定、半裁し土の堆積状況を記録した。遺物が出土した際には遺物出土状況写真・図面を作成した。遺物は遺構毎に 001 から通し番号を付けた。遺構の性格上、玉類の微細な副葬品の出土が想定されたため、玄室床面覆土全部と羨道覆土のうち床面から高さ 20㎝以下の堆積土については土嚢につめ、発掘現場にて２㎜メッシュのフルイかけ作業を実施した。他の覆土は土嚢に詰め、シューターを利用して丘陵のふもとに移動し、発掘調査区外へ適宜搬出した。総搬出量は２ｔトラック 35 台分、７日台にのぼる。横穴内覆土の除去が終了後は完掘写真を撮影し、電子平板測量作業へ移行した。電子平板測量成果については、発掘調査期間中から発掘担当者が現地での照合を含め、随時確認して進めた。

Y=48.500
Y=49.000
X=-47.500
X=-48.000
X=-48.500
玉崎神社裏横穴群
東金女子高校
熊野神社
子安神社
作田東睡墓
田間神社
田間中央公民館
千葉地方法務局
東金出張所
両総用水
管理事務所
日本専売公社
東金営業所
東金簡易裁判所
上行寺
雷原神社
東金市老人
福祉センター
浅間神社
武道
職員会館
天満宮
東金新宿郵便局
関東農政局
千葉統計情報事務所
東金出張所
東金警察署
東金労働基準監督署
0
(1：5,000)
200m

第1図　周辺地形図



第２図　調査対象横穴位置図

第３図　迅速図による周辺地形

整理作業　発掘調査報告書作成にあたり、発掘調査において付けた遺構番号をそのまま使用したが、平成14年『千葉県所在洞穴遺跡・横穴墓詳細分布調査報告書』では本横穴群について30基が確認され、それぞれに○○号横穴と遺構番号が付されているため、分布調査での遺構番号を＜　＞内に表記し、対照できるようにした。整理作業は出土遺物の水洗・注記作業を行った後、遺物を遺構毎に種別分類してから、接合作業等を実施した。実測遺物はすべて手実測、銭貨については拓本を実施した。その後のトレース、挿図・写真図版作成から編集作業には、電子平板による測量成果を最大限活用するため、デジタル機材・ソフトを利用して作業した。その作業と併行して原稿執筆を行い、このたび報告書刊行となった。

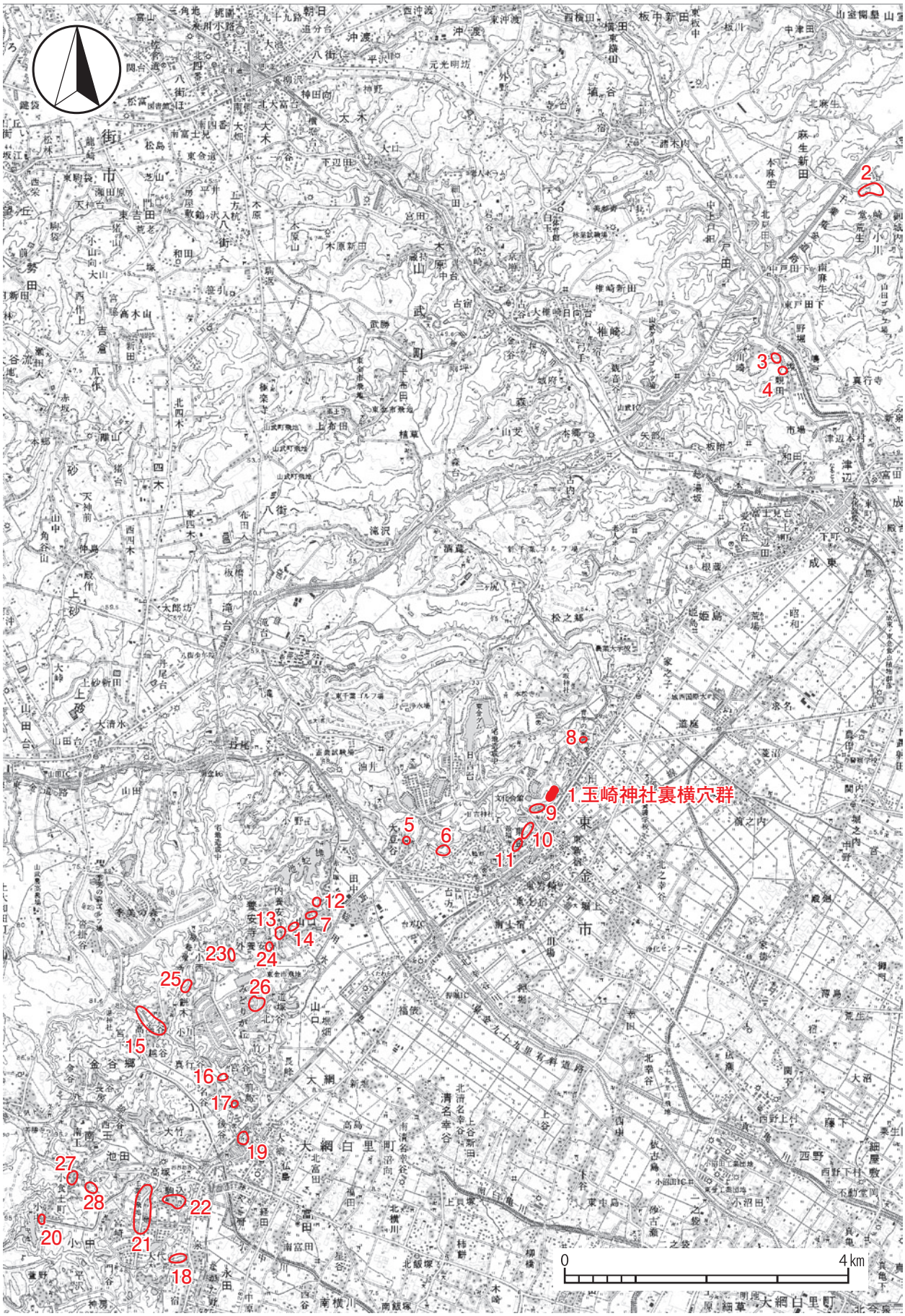
第２節　遺跡の位置と周辺横穴（第１～４図、第１表）

玉崎神社裏横穴群は東金市の油井台先端、真亀川により細かく開析された九十九里平野に面する田間支台に位置する。ふもとの現集落が立地する平坦部が標高約10ｍ、横穴群が展開する丘陵状台地頂部は標高約47ｍである。横穴は丘陵状台地の南東側斜面部（標高29ｍ～39ｍ）に並ぶように造営されている。調査前の現況は台地中腹にある玉崎神社の裏山にあたる山林であった。神社を作る際に台地中腹の平場を広げるため斜面部をほぼ垂直に切り出しており、その部分に所在した横穴は羨道・前庭部を失っていた。

千葉県に分布する横穴は詳細分布調査によって811遺跡、4,557基が確認されている。特に、東上総地域は横穴群が濃密に分布することで知られる。横穴群のほとんどが九十九里平野を見下ろす台地・丘陵斜面部に分布するが、山武市の金尾横穴群（２）、親田北・東横穴群（３・４）は若干内陸に入り込んだ台地斜面部に立地する。横穴の分布は第４図の更に南に茂原市域の横穴群が展開するが、横穴のない地域が間に存在することから、図の範囲を横穴分布の１単位として捉えることが可能である。形態としては玄室を羨道部より高く造り出す高壇式横穴が主体で、玄室天井はドーム・アーチ形が多い特徴がある。山武郡市文化財センター・千葉県文化財センター等が実施した調査成果が蓄積されており、それぞれの横穴群の内容については一覧表[注)]にまとめた。なお、周辺横穴群を含めた分析は本報告書第４章のまとめにて詳述する。

注）主に2003『千葉県所在洞穴遺跡・横穴墓詳細分布調査報告書』千葉県教育委員会を参考に周辺横穴分布図を作成した。その分布調査で作成した「調査カード」も併せて参照した。一覧表の文献№は下記文献と対応する。

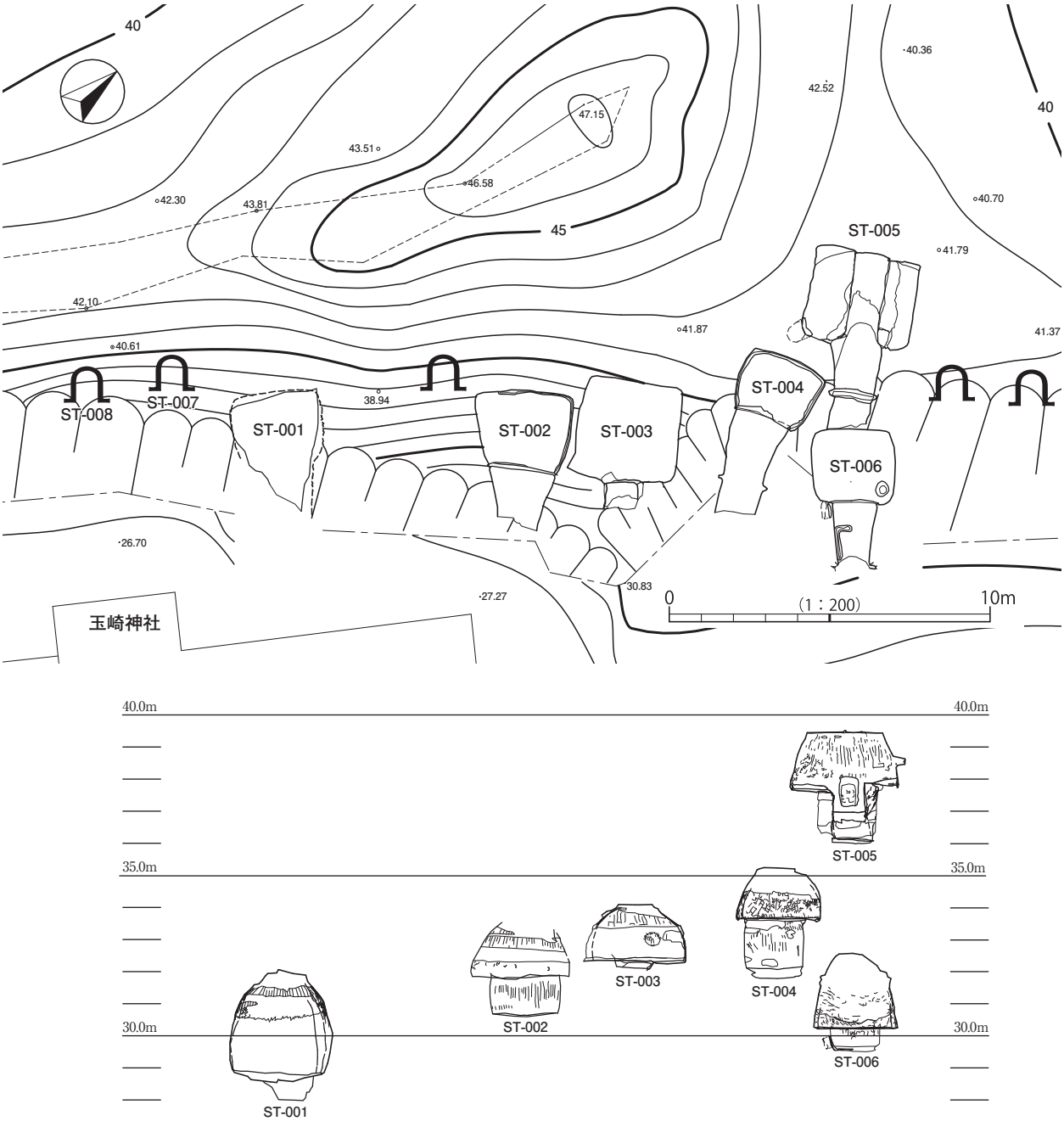
１．1983『古墳文化基礎資料 日本横穴地名表』吉川弘文館
２．1899　大野延太郎「上総國横穴調査」『東京人類学会雑誌』第15巻　第165号
３．1983『千葉県東金市 上行寺裏横穴 第６・７号横穴発掘調査報告書』山武考古学研究所
４．1989『千葉県東金市 岩崎横穴群』（財）山武郡南部地区文化財センター
５．1999『県道山田台大網白里線埋蔵文化財調査報告書２―大網白里町餅木横穴群―』（財）千葉県文化財センター
６．1926『史蹟名勝天然記念物調査』第二輯　千葉県
７．2002『大網白里町宮谷横穴群―地方特定道路整備埋蔵文化財調査報告書―』（財）千葉県文化財センター
８．1987『千葉県山武郡大網白里町 北後谷横穴』（財）千葉県文化財センター
９．1992『財団法人山武郡南部地区文化財センター年報№７―平成２年度―』（財）山武郡市文化財センター
10．1989『本宿横穴群確認調査報告書―大網城跡測量調査報告書―』（財）山武郡南部地区文化財センター
11．1989『財団法人山武郡南部地区文化財センター年報№４―昭和62年度―』（財）山武郡南部地区文化財センター
12．1986『千葉県大網白里町 瑞穂横穴群』（財）山武郡南部地区文化財センター
13．1995『道塚横穴・ヤグラ群』（財）山武郡市文化財センター
14．1974『千葉市史』第１巻・1976『千葉市史』史料編１
15．1979『千葉県文化財センター研究紀要』４　（財）千葉県文化財センター



第４図　周辺の横穴の分布

第１表　周辺の横穴一覧表

No.	遺跡名	よみ	所在地	基数	内　　容	文献No.
1	玉崎神社裏横穴群	たまさきじんじゃうら	東金市田間	30	高壇式主体。高壇やや低い横穴あり。玄室天井形態家形～ドーム形への変遷。完形の須恵器長頸壺・土師器坏、弓飾りの両頭飾鋲出土。	本書・1
2	金尾横穴群	かんのう	山武市松尾町金尾	3	鬼ヶ嶮横穴（東京人類学雑誌）のことか。５基以上？。羨道部長い。	15
3	親田北横穴群	おやだきた	山武市親田	1	崩落等により内容不明。	
4	親田東横穴群	おやだひがし	山武市親田	1	崩落等により内容不明。	
5	朱塗の横穴	しゅぬりの	東金市大豆谷字村前	1	羨道部幅がやや狭く、両袖。玄室天井ドーム形か。玄室奥に石塔（五輪塔？）あり。	
6	谷横穴群	やつ	東金市東字谷	13	１～６号が残存、７～13号は宅地造成にて消滅。高壇式横穴の玄室凹形含まれる。	1
7	千段穴横穴群	せんだんあな	東金市山口字川端	4	崩落等により内容不明。	
8	峰下横穴	みねした	東金市田間字峰下	1	高校の裏に所在するがコンクリートでふさがれる。	
9	上行寺裏横穴群	じょうぎょうじうら	東金市田間字新田	7	６・７号横穴調査。出土遺物なし。後世の改変あり。１号は高壇式横穴で玄室凹形。	1・3
10	新宿横穴群	しんしゅく	東金市東金字新宿	19	五十瀬神社裏に所在。１～５号のみ確認できる。	1
11	岩崎横穴群	いわさき	東金市東金字岩崎	20	20基の位置関係のみアドバルーン測量。玄室のみが残存。玄室平面－方形、天井－ドーム形か。７号横穴は高壇式の可能性有。	4
12	中谷横穴群	なかや	東金市山口字中谷	5	常安寺脇に所在。墓地に組み込まれるように一部再利用され改変されている可能性あり。	
13	正大横穴群	しょうだい	東金市山口字正大	10	海潮寺裏に所在。ほとんどが玄室の一部のみの遺存。	
14	山口谷津横穴群	やまぐちやつ	東金市山口字谷津	10	現状でも再利用されており、横穴群には新しいものも含まれている可能性あり。	
15	餅木横穴群	もちのき	大網白里町金谷郷	26	20基調査。未調査６基を含めると５群構成。すべて高壇式。天井形態はドーム形12基、アーチ形４基、不明４基。全室平面形はほとんどが隅丸横長方形、２基のみ円形。棺座ありが12基。７世紀中葉から８世紀第２。湖西産須恵器多数出土。貝出土。	1・5
16	宮谷横穴群	みやざく	大網白里町大網字西宮谷	7	４基発掘調査。天井部の崩落の少ない高壇式横穴。横穴に伴う可能性のある山頂部に墳丘状整形を２ヶ所有。玄室平面は方形と凹形。天井はすべてドーム形。	1・6・7
17	北後谷横穴群	きたうしろやつ	大網白里町金谷郷字向谷	1	当初片袖形で棺台を欠くものから奥壁・左側壁側を拡張、両袖形となりＬ字形棺台を有する。羨道奥から閉塞に使用した可能性のある石塊出土。貝出土。	8
18	永田横穴群	ながた	大網白里町永田	22	２号は玄室床面全域を棺台として利用。３号は両壁沿いに棺台、棟を模した陰刻。天井部に明瞭な工具痕。２基とも出土遺物なし。	1・9
19	本宿横穴群	ほんしゅく	大網白里町大網	7	全て玄室の一部のみの遺存。大網城の築城で一部削平。位置の確認調査のみ実施。玄室天井形は２号ドーム形、３号家形。	10
20	小中横穴群	こなか	大網白里町小中	4	１号横穴は天井ドーム形。玄室床面全域棺台利用か。玄門は玄室の軸より右にずれる。２～４号は玄室の奥壁のみ遺存。溝が壁面に沿って床面に掘られる。	11
21	瑞穂横穴群	みずほ	大網白里町みずほ台	43	７群で構成される。高壇式横穴63％で主体的。玄室平面形は方形、棺台はコの字またはないものが主体。玄室天井部はアーチ・ドーム形。閉塞施設の付設あり。８基で遺物出土。	12
22	駒込横穴群	こまごめ	大網白里町駒込	7	瑞穂横穴群の北東に位置。玄室の一部のみ遺存するものや崩落により不明のもの多い。	
23	小西横穴群	こにし	大網白里町小西	9	玄室の一部のみ遺存するものが多い。	
24	養安寺横穴群	ようあんじ	大網白里町養安寺	2	玄室の一部のみ遺存。	
25	風谷横穴群	かぜたに	大網白里町小西字風谷	2	玄室の一部のみ遺存。	
26	道塚横穴群	みちづか	大網白里町大網字道塚	4	１・２号－玄室奥壁のみ残存。３号－玄室床面すべてを棺台として利用。排水･区画溝あり。天井アーチ形。坏・甕・長頸壺・金環・玉類出土。７世紀初頭。４号－棺台造り出し、排水トンネル溝。天井部ドーム形。ほかにヤグラ９基、古道，火葬墓，建物跡。	13
27	南谷横穴群	みなみやつ	千葉市緑区小食土町南谷	8	小食土横穴群の一部。乙払込横穴群の西に位置。羨道部は崩落、現在再利用され遺存悪い。	1・14・15
28	乙払込横穴群	おっはらいこみ	千葉市緑区小食土町乙払込	4	小食土横穴群の一部。南谷横穴の東に位置。４基が南に開口、内３基が高壇式横穴。№１横穴は袖は弱く、やや新しい時期のものか。	1・14・15



第５図　調査横穴の平面・立面分布

第２表　遺構一覧表

遺構№	種　類	主　軸	玄室 平面形状	玄室 断面形状	高壇の有無	時　期	備　　考
ST-001	横穴	N-34° -W	（隅丸）方形	（ドーム）	（有）	古墳時代終末期	後世改変により遺存不良。
ST-002	横穴	N-46° -W	逆台形	ドーム（家形）	有	古墳時代終末期	完形須恵器・土師器出土。
ST-003	横穴	N-45° -W	方形	ドーム（家形）	無	古墳時代終末期	細羨道。
ST-004	横穴	N-29° -W	（隅丸）方形	ドーム	有	古墳時代終末期	閉塞施設あり。
ST-005	横穴	N-41° -W	横長方形	家形	有	古墳時代終末期	閉塞施設あり。
ST-006	横穴	N-48° -W	（隅丸）方形	ドーム	有	古墳時代終末期	壇低い。閉塞施設あり。
ST-007	横穴	-	（隅丸）方形	アーチ	（有）	古墳時代終末期	工事立会。玄室のみ遺存。
ST-008	横穴	-	（隅丸）方形	ドーム	（有）	古墳時代終末期	工事立会。玄室のみ遺存。

第２章　遺構と遺物

第１節　遺　構（第５図、第２表）

玉崎神社裏横穴群では、急傾斜地崩落対策事業の切土により削平工事され、影響を受ける８基の内６基について通常の発掘調査を実施した。残り２基については十分な安全面を確保して調査を実施することが不可能であったため工事立会の取り扱いとなり、略測と写真撮影を行い、記録保存した（ST-007・008：第３節）。発掘調査対象の横穴群は玉崎神社の社殿が建てられた平場とほぼ同じ高さで開口する ST-001 が単独で位置し、やや離れてその東側に ST-002・003 が隣接する。その東側には ST-004 ～ 006 がまとまって分布し、ST-005・006 は横位置がほぼ同じで高さを違えて造営される。なお、危険なため発掘調査を実施できなかったが、横穴の展開する部分の丘陵頂部には不整形だが周りより高い部分が確認できる。

ST－001＜分布地図 18 号横穴＞（第６図、図版３）

玉崎神社社殿の真横に位置し玄室が大きく開口しており、本横穴群の存在を明らかにしていた横穴である。他の横穴に比べ神社の平場と高低差が少ないため、後世の出入りがしやすく改変が著しい。本来は ST-006 とほぼ同じ高さに玄室が作られていたと考えられる。

土層堆積　後世に掘り下げられた部分への二次堆積である。崩落した地山（砂塊）が多く堆積し、羨道部にあたる位置では現代の瓦が多量に含まれていた。

玄　　室　下位に大きく改変され、天井部も崩落しているため遺存しているのは側壁の一部のみで、床面は完全に失われている。平面形はやや奥壁側が広がる隅丸方形と考えられる。壁面工具痕の遺存する下端が玄室床面の高さと推定される。天井形状は、壁面の四隅の稜は天井に向かい、奥壁はやや直立気味であるが、明確な稜をもたずに各壁面が天井頂部に至るためドーム形と捉えられる。羨道との境の袖部は丸みを有し、不明瞭になっている。壁面には「天ノ川」等、後世の落書きがみられる。

隔　　壁　玄室と同様に羨道部床面も後世に掘り下げられているため隔壁は失われている。玄室・羨道側壁面の工具痕の遺存状況から、約 148cm の隔壁が存在していたと考えられる。玄室平面規模からみて隔壁が掘り込まれる凹形にはならない。

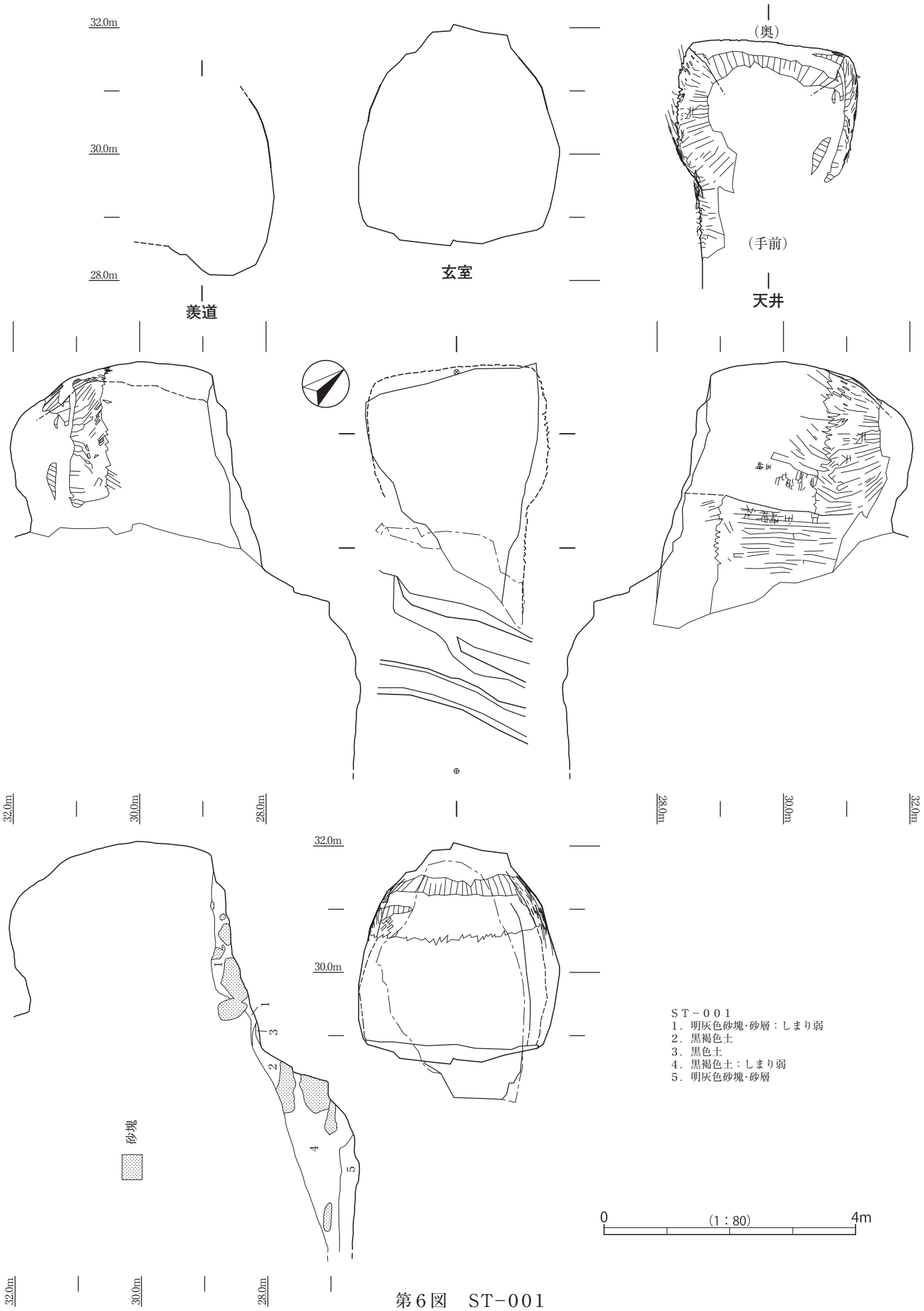
羨　　道　羨道床面は玄室側で約 50cm 掘り下げられ、入り口側は更に深く掘り込まれる。羨道の前庭部側の側壁はほとんど遺存しておらず、閉塞施設の有無は不明である。玄室と同様に、側壁には「玉崎神社」という後世の落書きがみられる。

前 庭 部　社殿築造時に平場として台地斜面部を削平した部分に当たり、完全に失われている。主軸と直行方向に溝が検出されたが、検出面はあまりに低く横穴に伴うものとは考えられない。

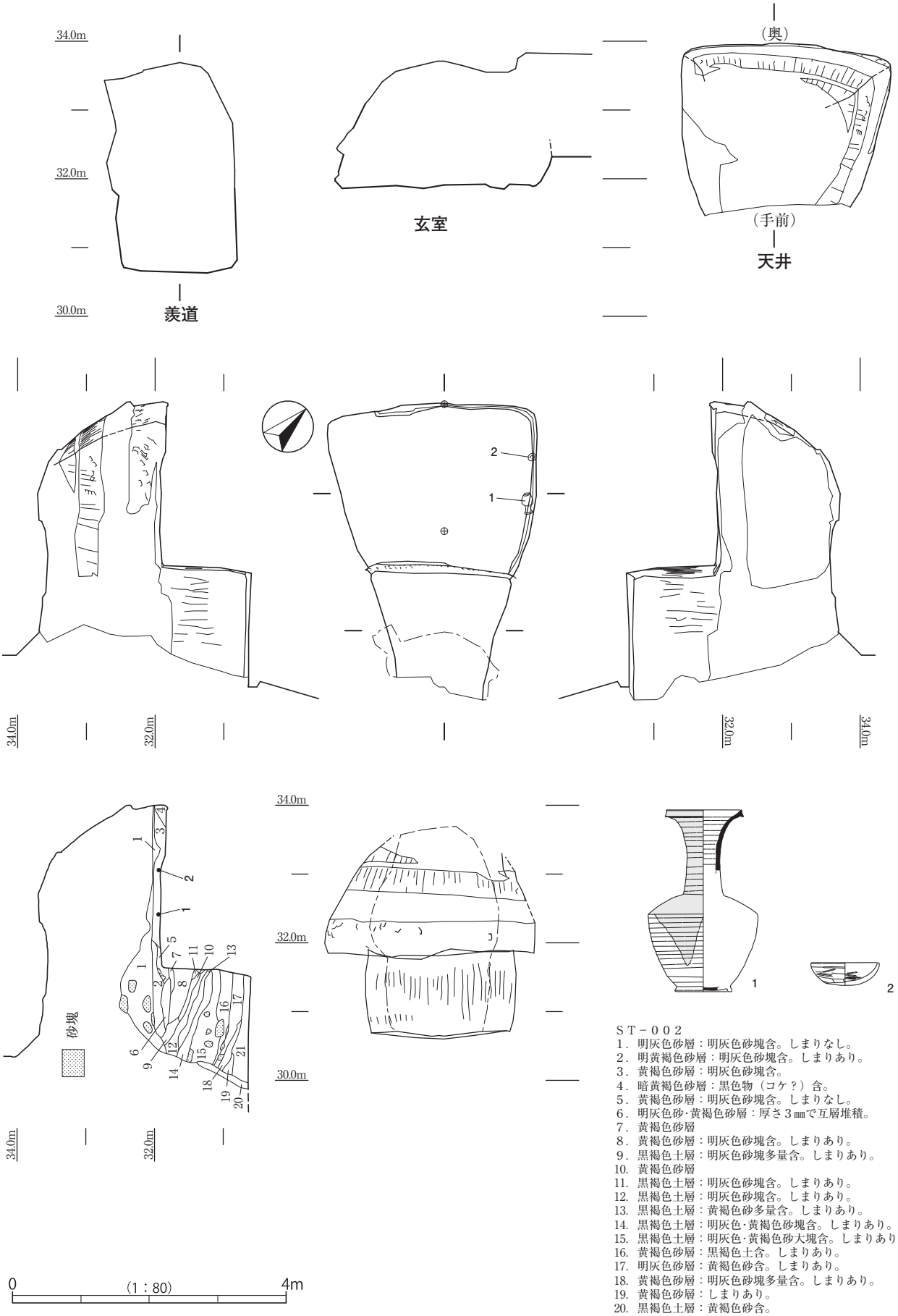
遺物出土状況　現代の瓦が羨道部にあたる位置から多量に出土した。神社の屋根の葺き替えによるものと考えられる。玄室にあたる部分にも瓦が少量出土している。横穴に直接関わる遺物の出土はなく、玄室覆土のフルイ作業により近世陶器小破片と鉄製品が出土した。鉄製品は新しい時期の釘や金具類のみであったため実測は行わなかった。

ST－002＜分布地図 13 号横穴＞（第７図、図版４・５）

ST-003 と玄室部分が接するように造営され、主軸もほぼ一致する。現状では玄室天井部右側が崩落して横穴間を移動できるように連結した状態となっている。ST-001 と同様に社殿築造時に台地斜面裾部が


32.0m
30.0m
28.0m
羨道
玄室
(奥)
(手前)
天井
砂塊
ST－001
1．明灰色砂塊･砂層：しまり弱
2．黒褐色土
3．黒色土
4．黒褐色土：しまり弱
5．明灰色砂塊･砂層
0
(1：80)
4m

第6図　ST－001



ＳＴ－００２
1．明灰色砂層：明灰色砂塊含。しまりなし。
2．明黄褐色砂層：明灰色砂塊含。しまりあり。
3．黄褐色砂層：明灰色砂塊含。
4．暗黄褐色砂層：黒色物（コケ？）含。
5．黄褐色砂層：明灰色砂塊含。しまりなし。
6．明灰色砂･黄褐色砂層：厚さ３㎜で互層堆積。
7．黄褐色砂層
8．黄褐色砂層：明灰色砂塊含。しまりあり。
9．黒褐色土層：明灰色砂塊多量含。しまりあり。
10．黄褐色砂層
11．黒褐色土層：明灰色砂塊含。しまりあり。
12．黒褐色土層：明灰色砂塊含。しまりあり。
13．黒褐色土層：黄褐色砂多量含。しまりあり。
14．黒褐色土層：明灰色･黄褐色砂塊含。しまりあり。
15．黒褐色土層：明灰色･黄褐色砂大塊含。しまりあり。
16．黄褐色砂層：黒褐色土含。しまりあり。
17．明灰色砂層：黄褐色砂含。しまりあり。
18．黄褐色砂層：明灰色砂塊多量含。しまりあり。
19．黄褐色砂層：しまりあり。
20．黒褐色土層：黄褐色砂含。
21．黄褐色砂層：明灰色砂含。しまりあり。

第７図　ST－002

掘削され、羨道部半分から前庭部にかけて完全に失われている。

土層堆積　羨道奥部をピークに約 185cm、玄室部分が 18cm の厚さで砂塊や土砂が堆積していた。他の横穴と比較して細かく分層することが可能で、羨道入口部から土砂が入り込むように堆積している様子が読み取れる。第２層上面は平らであり、後世に再利用した際の整地面の可能性がある。

玄　　室　玄室平面形は奥壁辺が広い逆台形である。奥壁と右壁側の床面には浅い溝が検出された。左壁側床面にも巡っていた可能性があるが、明瞭には確認されなかった。袖部はなく羨道部側壁に連続してつながる。床面四隅から立ち上がる稜線は奥壁側の２角は明瞭で、立ち上がり中位でわずかに角度が変換し、天井部へ至る。天井頂部は崩落している。全体的にはドーム形の天井であるが、奥壁の立ち上がり部分は直立気味で、角度変換点が屋根部との境を示す家形の名残と捉えられる。床面は全体的に平らではなく、奥壁寄りと左側壁寄りがやや低いが、棺座のようにしっかりと掘り込んだものではない。

隔　　壁　約 134cm の高さである。玄室床面とほぼ直角で、他の壁面と同様に工具痕が確認された。

羨　　道　羨道奥部が玄室幅に合わせるように緩やかに開く形状である。入口側半分相当が削平されているため、閉塞施設は確認できない。床面はほぼ水平に構築される。天井部は崩落のため失われている。

前 庭 部　削平され確認できない。前庭部が存在したとしても、隣接する ST-003 とは羨道部床面高さに差があるため、共有していたとは考えにくい。

遺物出土状況　玄室から須恵器長頸壺（１）と土師器坏（２）がほぼ完形で出土した。出土位置は２点とも玄室右壁沿いの壁溝内である。長頸壺は口縁部を入口側に向けて倒れた状態、坏は口縁を床面に伏せた逆位の状態で検出された。長頸壺の中には砂が入り込んで固まっていた。そのほかに横穴に直接関わる遺物はなく、玄室覆土のフルイ作業により銭貨（十円･五十銭硬貨）と鉄製品が出土した。鉄製品は形状、遺存状況から考えて新しい時期の釘や金具類のみであり、実測は行っていない。

ST－003＜分布地図 12 号横穴＞（第８図、図版６・７）

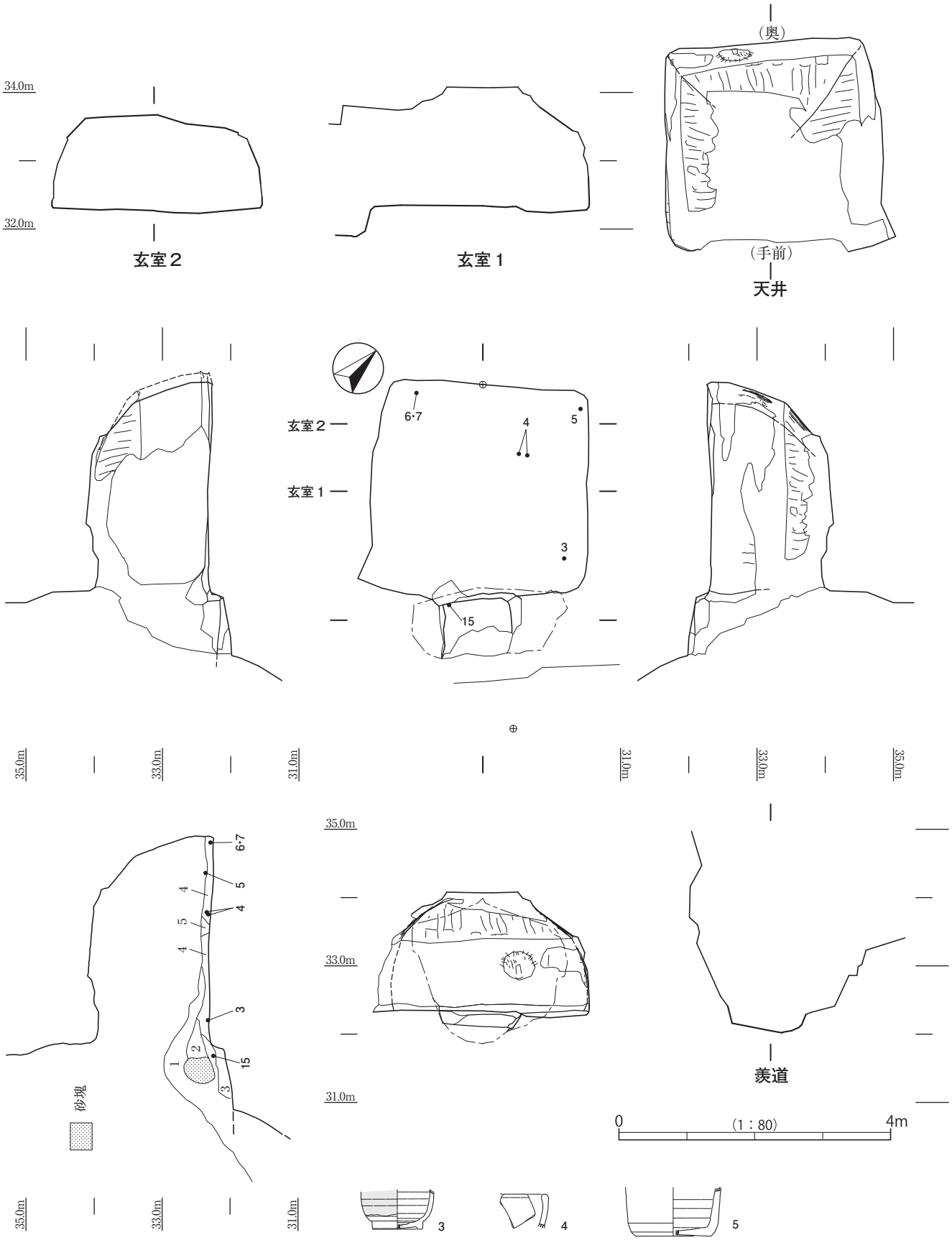
ST-002 と玄室西側が接するように造営され、現状では玄室西側部分は開通しているが、天井部が崩落する前は独立していたと考えられる。

土層堆積　羨道奥部をピークに 65cm の厚さで土砂が堆積していた。ほとんどが羨道天井部崩落土である。第３・４層は早い段階に堆積したものと考えられ、その層の上面は羨道部との段差がほとんどなく、後世に出入りがしやすい状態であったと思われる。玄室中央部には火を焚いた跡も確認されたが、炭・焼土の状況からみて近現代の新しい時期のものと判断した。

玄　　室　玄室平面形は方形である。羨道部幅は玄室部幅に比べかなり狭く、しっかりとした袖部を有する。床面四隅から立ち上がる稜線は明瞭である。各側壁面はそれぞれ丸みをもって内傾しながら立ち上がり、上部では明確に角度変換して直線的な屋根部分を形成する。屋根部と壁部の境も意識的に稜を造り出している。天井頂部は崩落しており明瞭ではないが、各面が頂部へ向かっているため寄棟造と判断できる。床面は範囲が明瞭でないが、右側奥が若干低くなっている。周溝は存在しない。奥壁には後世のものと考えられる落書きがみられる。

隔　　壁　低い形態で、玄室との高低差は 24cm である。玄室床面との境の稜は崩れて明確でない。

羨　　道　幅が狭く、玄室幅との差が大きい。床面は遺存部分が少なくはっきりしないが、やや緩やかに入口方向へと低く傾斜していたものと考えられる。閉塞施設部分は崩落で失われているため不明である。天井部もほとんど崩落して失われている。



ＳＴ－００３
1．明黄褐色砂層：黄褐色･明灰色砂含。
2．明黄灰色砂層：黄褐色･明灰色砂小塊含。
3．黒褐色土層：黄褐色砂小塊含。
4．第３層より暗い色調。
5．焼土層：砂･炭粒子含。

第８図　ST－003

前 庭 部　崖状に羨道部途中から崩落しており遺存していない。

遺物出土状況　玄室内覆土から鉄製品破片が出土した。遺存が悪く製品を特定できないものが多いが、弓に装着する両頭飾鋲（11）が含まれる。その他は鉄鏃または釘の破片、板状金具、小型の鎹（６～10）である。また、玄室右半分から近世の土器類（３～５）が破片で出土した。床面より若干浮いた位置での出土である。羨道部の覆土中層から寛永通寶（15・16）も出土した。玄室覆土のフルイ作業では小動物の骨も回収できたが時期の特定はできない。

ST－004＜分布地図 11 号横穴＞（第９図、図版８・９）

今回の調査対象横穴の中で最も規模が小さいものであるが、羨道部の側壁の遺存は良好で、横穴構造を比較的把握できる横穴である。

土層堆積　土砂の堆積は最大で 216cm の厚さであるが、玄室は天井の崩落があるのにもかかわらず堆積厚は５cm 程度でかなり薄い。玄室部分は水平堆積であり、後世の再利用の際に平らに整地したためと考えられる。羨道部の覆土上半分は天井崩落土を主体とし、大きい砂塊が含まれる。堆積状況は大きく２段階で、閉塞施設崩壊後５～14 層が随時堆積し、次に大きな崩落により１～４層が堆積したと考えられる。第４層上面は平らで、土自体もしまりがあるため、第２層上面とセットで後世の再利用の一時期の面とも捉えられる。

玄　　室　玄室平面形は小型方形である。袖部は緩やかに羨道へと連続し不明瞭である。床面は凹凸があり、工具痕が確認でき、周溝はしっかりと全周する。床面四隅から立ち上がる稜線は明瞭で、緩やかに弧を描きながら天井部へ向かう。各壁面も弧を描き天井形はドーム形であるが、頂部の遺存は不良である。

隔　　壁　高さ 160cm であり、壁面の工具痕も比較的遺存し確認できる。所々穴が開いており、足掛け痕の可能性があるが、不整形であり断定できない。

羨　　道　軸がやや歪み直線的ではない。入口部両壁面に縦の溝状の閉塞施設を有する。規模は幅 13cm、深さ（奥行）10cm 程度である。床面は入口部に向かい緩やかに傾斜する。天井頂部は崩落するが、壁面は上位まで遺存し、工具痕も明瞭に確認できる。

前 庭 部　羨道部の閉塞施設から先も床面が続くが、前庭部へ広がる前に傾斜が急になり、確認されなかった。

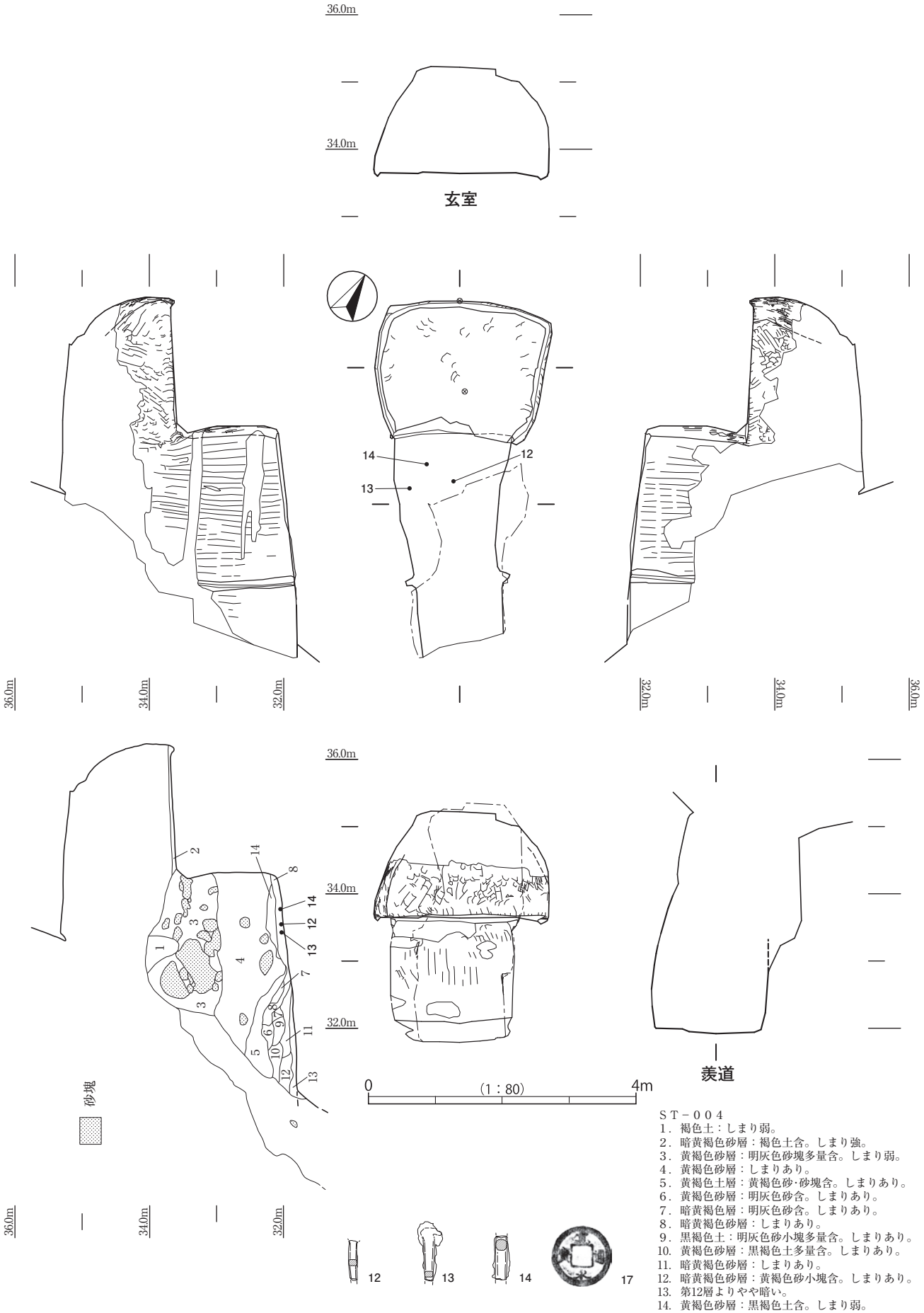
遺物出土状況　羨道部床面に近い位置から鉄製品が３点（12 ～ 14）出土した。遺存状態・出土位置から横穴に直接関連するものと考えられる。玄室覆土のフルイ作業により寛永通寶（17）が出土した。他に木片（炭化したもの含む）・骨小破片が出土したが、遺存状態からみて近現代の新しい時期のものと判断した。

ST－005＜分布地図 10 号横穴＞（第 10 図、図版 10 ～ 12）

今回の調査対象横穴の中で唯一、玄室床面中央部が掘り込まれる形状の横穴である。

土層堆積　羨道天井部の遺存が良好なため、土砂堆積は比較的薄い。羨道部閉塞施設の位置での堆積が一番厚く約 90cm である。第６層下部には近現代に再利用した際の板敷痕がみられる。第６層中には現代の瓦が含まれており、火を焚いていた痕跡も確認された。

玄　　室　平面はやや横長の方形を呈し、羨道部床面より 152cm 高い玄室床面の中央部を幅約 50cm の通路状に掘り込まれる。その通路状部分自体も羨道床面よりも約 50cm 高い。羨道部寄りは地山がとろけるように崩れてしまっている。玄室は中央の通路状部分により２分割され、それぞれが棺台的な機能を



ＳＴ－００４
1．褐色土：しまり弱。
2．暗黄褐色砂層：褐色土含。しまり強。
3．黄褐色砂層：明灰色砂塊多量含。しまり弱。
4．黄褐色砂層：しまりあり。
5．黄褐色土層：黄褐色砂･砂塊含。しまりあり。
6．黄褐色砂層：明灰色砂含。しまりあり。
7．暗黄褐色層：明灰色砂含。しまりあり。
8．暗黄褐色砂層：しまりあり。
9．黒褐色土：明灰色砂小塊多量含。しまりあり。
10．黄褐色砂層：黒褐色土多量含。しまりあり。
11．暗黄褐色砂層：しまりあり。
12．暗黄褐色砂層：黄褐色砂小塊含。しまりあり。
13．第12層よりやや暗い。
14．黄褐色砂層：黒褐色土含。しまり弱。

第９図　ST－004

有していたものと考えられる。床面の四隅は稜を有しながら立ち上がる。側壁面は直線的に内傾し、奥壁と前壁面はやや丸みを持ちつつ頂部へ立ち上がる。壁面途中には角度変換点や稜は存在せず、玄室天井部は家の屋根部のみを表現しているようである。天井頂部は主軸に対して直行する方向に屋根の棟木が２本の沈線で浮き彫り状に表現される。屋根部には小さい掘り込みが複数みられるが、工具痕・位置的なことを考慮すると後世に掘られたものと考えられる。

隔　　壁　中央部の隔壁は崩れており位置がはっきりしないが、玄室中央部の掘り込みが玄室奥部と同じ高さであったとすれば、50cm 程の段差が本来は存在していたものと考えられる。

羨　　道　遺存は比較的良好であり、閉塞施設までの側壁が確認された。側壁の溝に連続して床面にも主軸と直行する方向に細い溝が検出された。一体のものとして閉塞施設に関わるものと考えられる。溝より前庭部側の床面は緩やかに傾斜する。

前 庭 部　傾斜が大きく変換する部分から前庭部域に入る可能性が高いが、平面的な広がりは捉えることはできない。

遺物出土状況　羨道入口部にあたる覆土上層から銭貨（聖宋元寳）が１点（18）出土した。他には木片・缶状の鉄片が採集されたが、遺存状態からみて新しい時期のものと考えられ、実測は行わなかった。

ST－006＜分布地図 17 号横穴＞（第 11 図、図版 13 ～ 15）

ST-005 の真下に位置する。玄室壁面の工具痕は、他の横穴と比べ異質であり、特に壁面下位は角のある工具痕で、後世に下位に空間を広げるための改変が行われている可能性がある。

土層堆積　羨道の天井部が完全に崩落しているため、堆積厚は最大で 270cm に達する。羨道奥部を頂部とした断面三角形状に堆積する。巻貝（ダンベイキサゴ）のブロックは第 18 層上面で検出されており、玄室床面から第 18 層・19 層・23 層上面の平面が一時期再利用された可能性が高い。

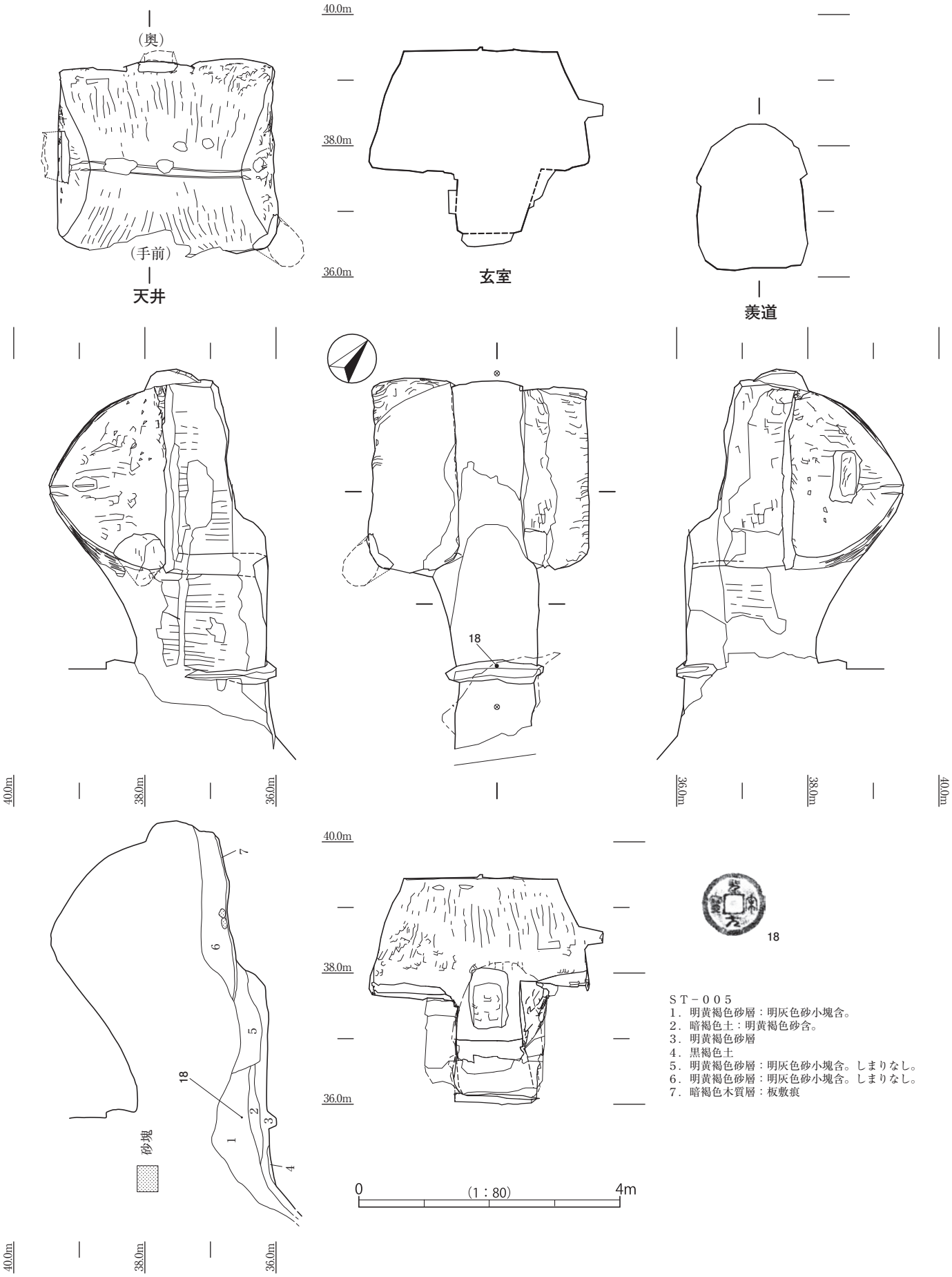
玄　　室　平面はやや丸みのある方形を呈し袖部を有する。玄室奥壁は大きく奥へ改変され、天井部も崩落があり遺存は不良である。床面四隅からの稜線はやや直立気味に立ち上がり、各壁面も緩やかに内傾し天井部へ向かう。壁面に角度変換点や稜はなく天井形状はドーム形である。床面は全体的に凹凸が多い。右手前袖部に近くに浅く丸い掘り込みがみられるが、炭化物・焼土の状況から近世以降に火を焚いた跡であると判断できる。玄室高さは天井部が崩落しているとはいえ、他の横穴と比べ高く、玄室壁面下位（高さ 30cm）にみられる粗い工具痕は玄室を掘り下げた後世の改変による可能性が高い。

隔　　壁　現状では高さは約 55cm であるが、後世の改変を考慮すると更に 30cm を見込む必要がある。

羨　　道　床面と側壁の遺存は比較的良好である。ほぼ直立して側壁は立ち上がり、側面の工具痕は他の横穴とほぼ同じである。奥壁寄り左側下位に横 40cm・縦 32c m・奥行 28cm の小さな横穴が穿たれる。丁寧な整形で、羨道床面や ST-004 玄室床面周溝の工具痕と近く、横穴に伴う可能性があるが、用途は不明である。壁面は閉塞施設部分まで遺存し、両側壁には縦方向の溝が掘り込まれるが、床面の溝は崩落のため有無は不明である。羨道床面中程から左手前に浅く細い溝が確認された。

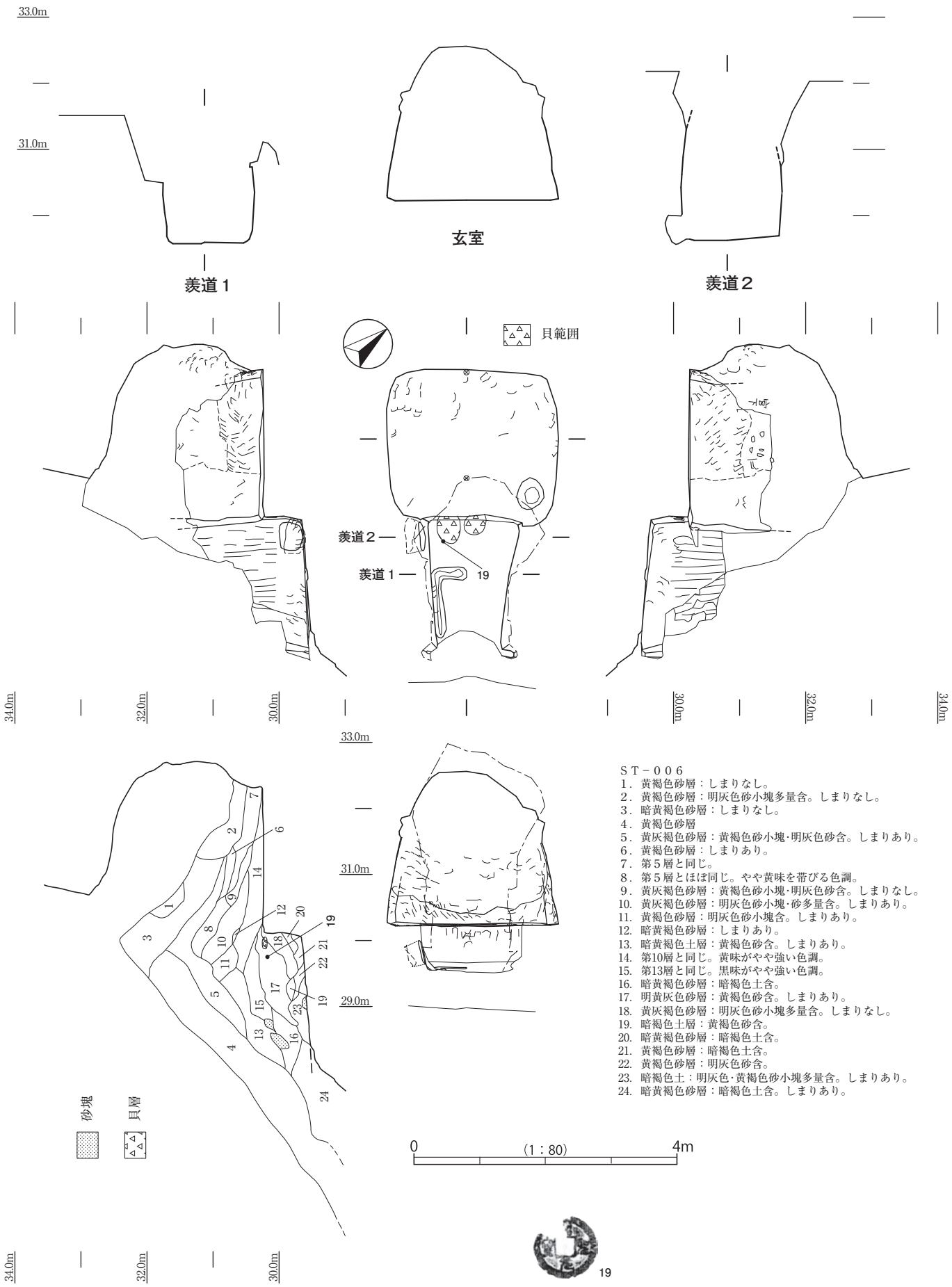
前 庭 部　羨道部閉塞施設から入口側は斜面で崩落しており前庭部を確認することはできなかった。

遺物出土状況　羨道部奥の隔壁に近い部分で、巻貝（ダンベイキサゴ）のブロックと銭貨（紹聖元寳）１点（19）が出土した。出土位置は高壇の玄室床面と同じ高さであり、横穴に直接関わる時期のものではないと判断できる。なお、玄室覆土のフルイ作業では遺物は出土しなかった。



ＳＴ－００５
1．明黄褐色砂層：明灰色砂小塊含。
2．暗褐色土：明黄褐色砂含。
3．明黄褐色砂層
4．黒褐色土
5．明黄褐色砂層：明灰色砂小塊含。しまりなし。
6．明黄褐色砂層：明灰色砂小塊含。しまりなし。
7．暗褐色木質層：板敷痕

第10図　ST−005



ＳＴ－００６
1．黄褐色砂層：しまりなし。
2．黄褐色砂層：明灰色砂小塊多量含。しまりなし。
3．暗黄褐色砂層：しまりなし。
4．黄褐色砂層
5．黄灰褐色砂層：黄褐色砂小塊･明灰色砂含。しまりあり。
6．黄褐色砂層：しまりあり。
7．第５層と同じ。
8．第５層とほぼ同じ。やや黄味を帯びる色調。
9．黄灰褐色砂層：黄褐色砂小塊･明灰色砂含。しまりなし。
10．黄灰褐色砂層：明灰色砂小塊･砂多量含。しまりあり。
11．黄褐色砂層：明灰色砂小塊含。しまりあり。
12．暗黄褐色砂層：しまりあり。
13．暗黄褐色土層：黄褐色砂含。しまりあり。
14．第10層と同じ。黄味がやや強い色調。
15．第13層と同じ。黒味がやや強い色調。
16．暗黄褐色砂層：暗褐色土含。
17．明黄灰色砂層：黄褐色砂含。しまりあり。
18．黄灰褐色砂層：明灰色砂小塊多量含。しまりなし。
19．暗褐色土層：黄褐色砂含。
20．暗黄褐色砂層：暗褐色土含。
21．黄褐色砂層：暗褐色土含。
22．黄褐色砂層：明灰色砂含。
23．暗褐色土：明灰色･黄褐色砂小塊多量含。しまりあり。
24．暗黄褐色砂層：暗褐色土含。しまりあり。

第11図　ST－006

第２節　遺　物

出土遺物は天井部が崩落していたものの、横穴の玄室は一部開口しており極めて少なかった。横穴造営期に直接関わる遺物は須恵器・土師器１点ずつと鉄製品のみである。玄室の覆土を中心にフルイかけを実施したが、玉類の出土はなかった。他には中近世の銭貨・陶器破片等が出土した。

土器類（第 12 図、第３表、図版 15）

１は須恵器の長頸壺である。口縁端部や底部高台の一部に欠けがみられるものの、ほぼ完形である。器面の上面部には自然釉が施される。底部と体部下位は回転ヘラケズリ調整である。高台は付け高台で、底面に使用による擦れはほとんど確認できない。焼成は良好で堅緻である。胎土は緻密で白色微粒子がわずかに含まれ、黒色の吹き出しが多くみられる。色調や焼成の特徴から恐らく東海地域産の須恵器であると考えられる。体部上位が稜を有し、強く屈曲する形状である。頸部の立ち上がりは比較的長く、口縁端部を丁寧に作り出して整形している。

２は土師器の小型坏である。口縁端部にやや擦れて削れた部分があるが、ほぼ完形である。口縁端部は短く直立するように調整される。内面は黒色を呈し、黒色処理されていたと考えられる。外面は口縁から体部中位までは黒色部分があるが、遺存が悪く、全面黒色処理されていたかどうかは不明である。器面は全体的にやや荒れていて、調整はやや不明瞭であるが、内面はヘラミガキ、体部外面はヘラケズリ後ミガキ調整である。底面はヘラケズリ調整され、底部を意識して作り出している。

３～５は近世の遺物である。３は陶器徳利の体部から底部である。茶色の釉薬が体部外面に施される。底部中央は粘土を付け足している状況が断面から確認できる。内面のロクロ目はきつい。４は火鉢の口縁付近破片である。２点出土したが接点はない。断面中央部には焼成不良のためか胎土の色調が黒色の部分がみられる。口縁が緩やかな丸みをもって立ち上がる形態で、口縁上端部が使用のためかやや凹む。内外面とも黒色を呈する。５は火鉢底部付近の破片である。底部から胴部へは斜めに面が作られている。表面はやや光沢があり、内面は被熱のため白く変色している。底部中央の器厚はかなり薄くなる。他に実測はしなかったが、ST-001 の玄室部分の覆土をふるった際に近世の陶器小破片が１点出土している。

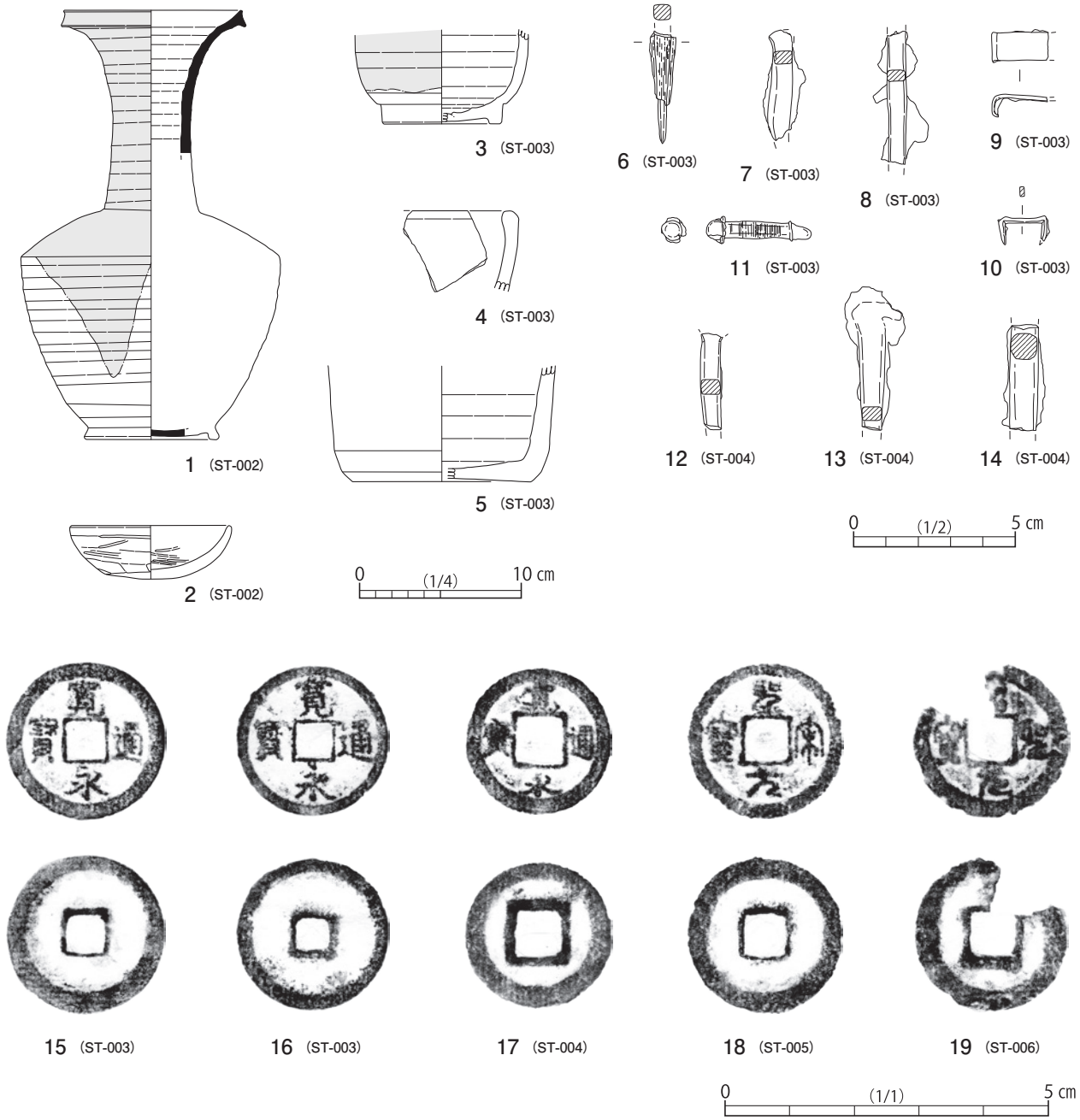
鉄製品（第 12 図、第４表、図版 15）

ほとんどが破片資料であり、全体的に遺存が不良で種別が不明瞭な物が多いが、弓に取り付ける両頭飾鋲とみられる製品も出土した。法量などは一覧表（第４表）の通りである。

６は頭部を欠損した鉄釘か鉄鏃の茎部と考えられる、茎部にしてはやや茎尻が太いため前者の可能性が高い。木質が付着している。７も鉄釘破片と考えられるが、断面形がやや平たい方形である。８は鉄鏃の頸部破片と考えられる。本体の他に別破片が銹着し、鉄鏃が複数副葬されていた可能性がある。９は端部が曲げられた薄い板状の金具である。10 は小型の鎹である、針部に少量の木質が付着している。11 は弓に装着される両頭飾鋲と考えられる。銹のため明確ではないが、本体端部を折り返す弁の切り開き方は深く４カットされる。頭部の片方はつぶれ、本体中央部には木質がわずかに付着する。12・13 は鉄釘の破片と考えられる。14 は他と比べ断面形大きくやや丸みを帯びる。工具等の柄部分の可能性がある。

銭　貨（第 12 図、第５表、図版 15）

ST-003・004 から寛永通寶、ST-005・006 から北宋銭が出土した。法量などは一覧表（第５表）の通りである。表には記入していないが、ST-002 からは昭和 52 年の十円と大正 13 年の五十銭硬貨が出土した。


1 (ST-002)
2 (ST-002)
3 (ST-003)
4 (ST-003)
5 (ST-003)
6 (ST-003)
7 (ST-003)
8 (ST-003)
9 (ST-003)
10 (ST-003)
11 (ST-003)
12 (ST-004)
13 (ST-004)
14 (ST-004)
0 (1/4) 10 cm
0 (1/2) 5 cm
15 (ST-003)
16 (ST-003)
17 (ST-004)
18 (ST-005)
19 (ST-006)
0 (1/1) 5 cm

第 12 図　出土遺物

第３表　土器観察表

（　）推定　〈　〉現在長

No.	遺構No.	遺物No.	種 類	器 種	法 量（cm）		遺存度	胎 土	色調（色処理）・焼成		技 法		備 考
1	ST-002	2	須恵器	長頸壺	口径	11.0	完形	精緻	内面	灰白（7.5Y7/2）	内面	ロクロナデ	表面に黒色の吹出あり。自然釉。
					底径	8.0			外面	灰（7.5Y6/1）	外面	ロクロナデ	
					器高	26.5			焼成	良好	底外面	回転ヘラケズリ	
2	ST-002	1	土師器	坏	口径	9.8	完形	微砂粒	内面	褐（7.5YR4/3）	内面	ミガキ	内面黒色処理・外面遺存不良。
					底径	丸底			外面	褐（7.5YR4/3）	外面	ヘラケズリ後ミガキ	
					器高	3.3			焼成	良好	底外面	ヘラケズリ	
3	ST-003	3	陶器	徳利	口径	－	体～底部35％	精緻	内面	明黄褐（10YR6/6）	内面	ロクロナデ	瀬戸・美濃産
					底径	（7.2）			外面	にぶい黄褐（10YR4/3）	外面	ロクロナデ	
					器高	<5.8>			焼成	良好	底外面	ヘラケズリ？	
4	ST-003	4，5	土器	火鉢	口径	－	口縁破片	微砂粒	内面	黒（7.5Y1.7/1）	内面	ナデ	スス？付着
					底径	－			外面	黒（7.5Y1.7/1）	外面	ミガキ	
					器高	－			焼成	やや不良	底外面	－	
5	ST-003	6，8	土器	火鉢	口径	－	体～底部20％	白色砂粒	内面	灰（7.5Y5/1）	内面	ロクロナデ	被熱のため剥落気味。
					底径	（11.0）			外面	黒（10YR2/1）	外面	ロクロナデ	
					器高	<7.1>			焼成	やや不良（硬質）	底外面	ヘラケズリ？	

第４表　鉄製品計測表

No.	遺構No.	遺物No.	種 類	長さ（mm）	幅（mm）	重量（g）
6	ST-003	7	鉄釘 or 鉄鏃茎部	34.0	8.0	1.90
7	ST-003	7	鉄釘 or 工具	34.0	7.0	3.17
8	ST-003	8	鉄鏃頸部？	41.0	6.0	3.48
9	ST-003	8	板状金具	18.0	9.0	0.53
10	ST-003	8	鎹	15.0	8.0	0.35
11	ST-003	8	両頭飾鋲	32.0	8.0	2.46
12	ST-004	2	鉄釘？	30.0	6.5	3.04
13	ST-004	4	鉄釘？	39.0	8.0	10.08
14	ST-004	3	工具柄？	33.0	9.0	6.62

第５表　銭貨計測表

No.	出土位置	遺物No.	銭貨名	初鋳年	計測値（単位：mm）					重量（g）	備　　考
					縁外径	縁内径	郭外径	郭内径	縁 厚		
15	ST-003	2	寛永通寶	1636	24.7	19.6	7.0	6.0	1.1	3.15	新寛永
16	ST-003	8	寛永通寶	1636	23.2	19.0	6.5	5.4	1.0	2.94	新寛永
17	ST-004	1	寛永通寶	1636	22.6	17.8	8.8	7.3	0.8	2.03	新寛永
18	ST-005	1	聖宋元寶	1101	24.3	20.2	7.9	6.7	1.4	3.08	篆書
19	ST-006	1	紹聖元寶	1094	24.1	18.4	7.7	6.5	1.3	2.24	篆書

第３節　工事立会

横穴の所在する部分の掘削工事は平成 24 年度に実施されることになっていたため、平成 23 年度中に ST-001 ～ 006 の発掘調査を行った。調査中に ST-006 の東側（右）で新たに横穴が開口したが、平成 24 年度の切土工事詳細測量の結果、その新規横穴については工事が及ばないことが確定したため追加発掘調査は発生しなかった。一方、第１章でも説明したとおり、工事範囲内でも急な崖面に玄室が遺存する横穴については工事内容・現場の状況を文化財課と事業者の間で協議した結果、通常の足場の設置が困難であり、かつ十分な安全を確保しての発掘調査が不可能であると判断され、工事立会との取扱いとなっていた。そこで、掘削工事前の平成 24 年 10 月 25 日に事業者との調整の上、現地にて工事立会を実施した。工事用足場を使用し、玄室内を確認することのできた２基の横穴について下記の所見を得た。

ＳＴ－００７＜分布地図 19 号横穴＞（第 13 図、図版２）

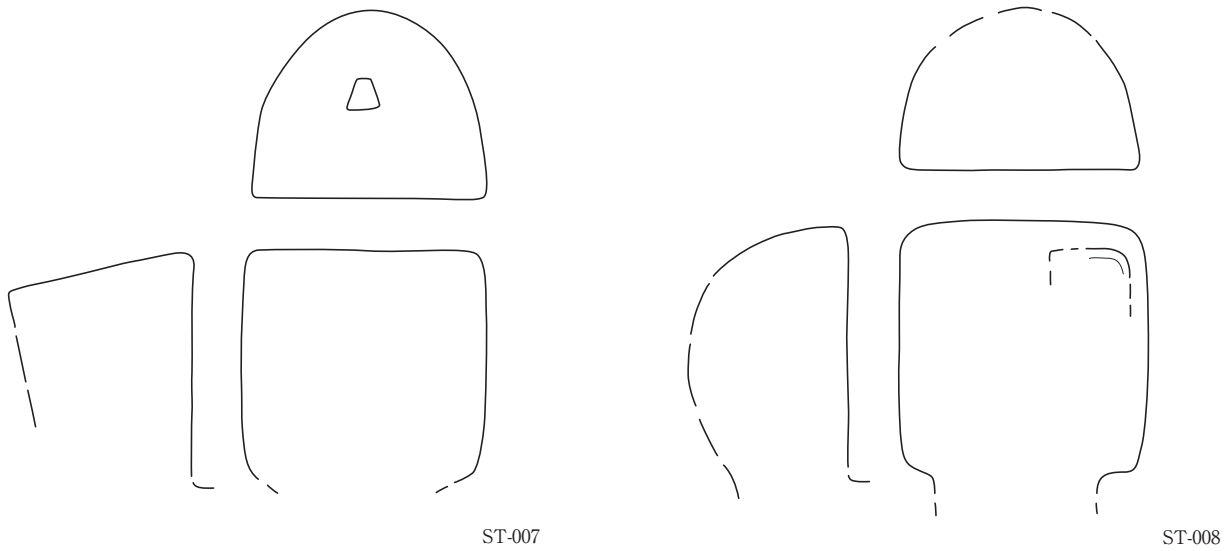
遺存状況　現状では玄室のみの遺存で、玄室の袖部がわずかに確認できた。工具痕は比較的明瞭である。斜面部下位には羨道部床面の一部が遺存すると思われ、段差のある高壇式横穴と考えられる。

玄　　室　玄室床面には全体的に土砂が薄く堆積している。平面形は角がやや丸みをもつ隅丸方形で、横幅約 260cm、奥行約 245cm である。奥壁の遺存は良好で側壁との稜線が明瞭である。奥壁は天井部に向かってやや内傾して直線的に立ち上がる。天井中心部は少し崩落しているが奥壁側が一番高く、天井形は縦アーチ形である。奥壁中央に龕状の掘り込みがあるが、形状・工具痕から新しい時期のものと考えられる。床面に棺座状の掘り込みは確認できなかった。

ＳＴ－００８＜分布地図 20 号横穴＞（第 13 図、図版２）

遺存状況　ST-007 の左側の約 170cm 高い位置に造営される。現状では玄室と羨道部奥の側壁の一部のみが確認できた。工具痕はやや不明瞭である。斜面部下位には羨道部床面の一部が遺存すると思われ、高壇式横穴と考えられる。

玄　　室　玄室床面の中央部に天井の崩落土ブロックが多く堆積している。平面形は角が丸みをもつ隅丸方形で、横幅約 270cm、奥行約 260cm である。天井頂部は大きく崩落しているが、床面四隅から立ち上がる稜線は天井中心部に向かっており、奥壁・側壁も内湾しているためドーム形を呈するものと捉えられる。天井高さは 170cm 以上である。床面右側壁寄りに棺座状の掘り込みの一部が確認できた。



第 13 図　ＳＴ－００７・００８略測図（S= 約 1/80）

第３章　まとめ

玉崎神社裏横穴群は30基の横穴から構成される。その中の６基について発掘調査、危険で通常の調査が不可能であった２基については工事立会にて略測・撮影作業を実施した。ここでは、明らかになった調査成果をいくつかの項目に分け、周辺地域の横穴との比較も含めて検討し、本横穴群の位置づけを行う[1)]。

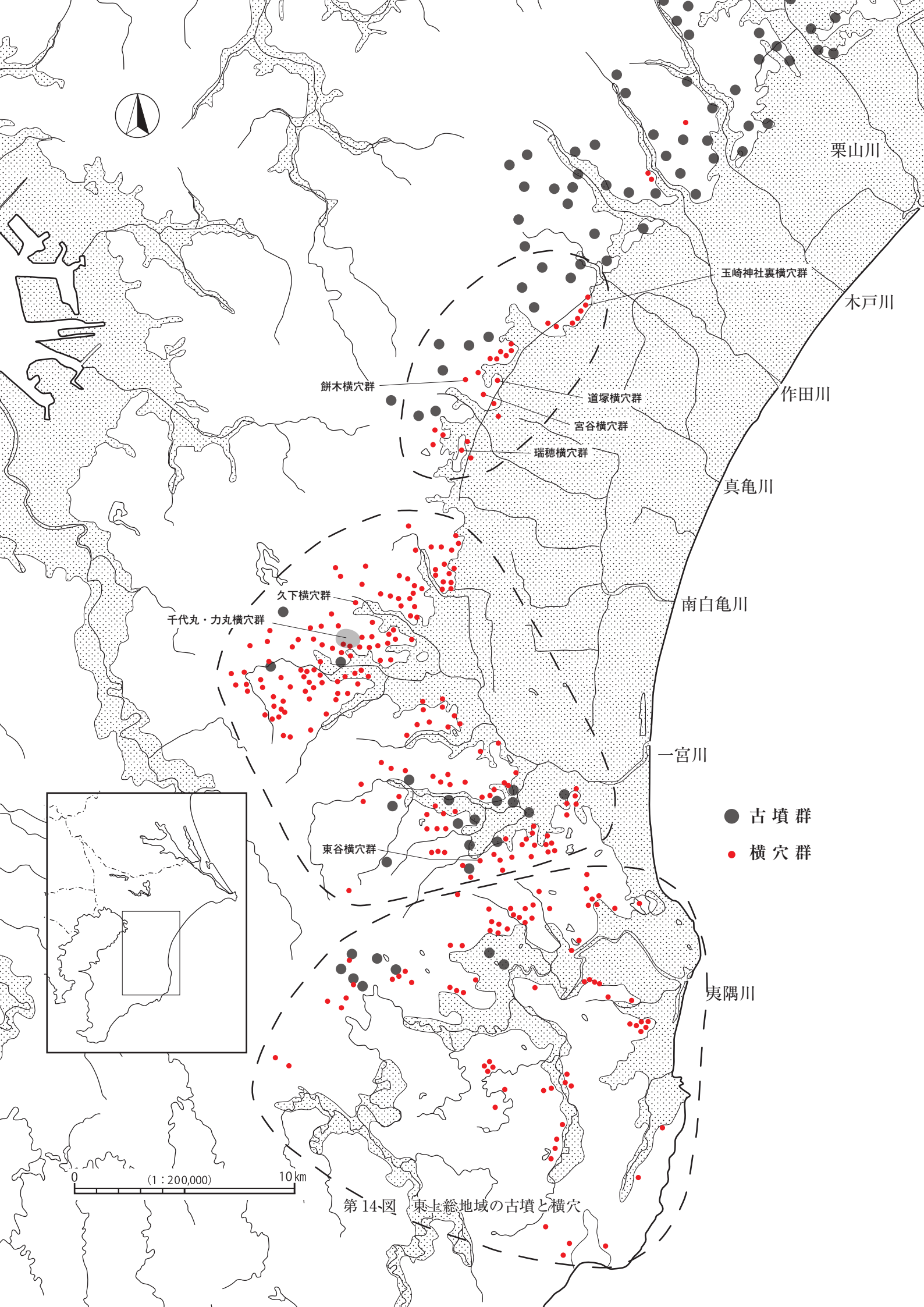
立　地　東上総地域は、横穴のあり方から大きく３地区に分離できる（第14図）。今回の玉崎神社裏横穴群を含む、東金・大網白里地区（真亀川・南白亀川流域）と、その南に位置する茂原・長生地区（一宮川流域）、夷隅地区（夷隅川流域）である。古墳群と横穴群の分布をみると横穴群は明らかに一宮川流域を主体に展開していることが分かり、高塚古墳の分布の希薄な部分を補完しているような分布状況を示している。本横穴群は東上総地域の横穴分布域の北東端、九十九里平野に面する丘陵状台地の南東側斜面部に位置する。現在の東金市街地に面して分布している真亀川流域のほとんどの横穴群の立地状況は極めて似かよっており、関連性の強いことがうかがえる。大きく台地内面に入り込む位置では横穴の分布は確認されていない。このことは東金市より北側に位置する作田川・木戸川流域の横穴群の立地状況とは明瞭に異なっている。

調査対象となった６基（ST-001 ～ 006）はまとまって造営されており、周辺に所在の確認できる横穴とともに１支群として捉えられる。しかし、横穴の築造されている高さはST-005が特に高く、その他の横穴についても高さは一定していないことから、前庭部の共有は想定しにくく、築造や葬送行為が複数の横穴で同時に行われることはなかったと考えられる。この支群の台地頂部については現状ではほぼ直立に切り立った斜面部であり、たどり着くことも危険を伴う状況のため通常の発掘調査は断念せざるを得なかった。微細地形図（第２図）や現地での観察によると、他の尾根部分に比べ塚状に高く確認できる。横穴本体と関連する可能性があるものとして注意する必要がある。

玄　室　今回調査した横穴玄室の平面形態は基本的に方形である。細分すると横穴主軸に対して横長の長方形 <ST-005>、角のはっきりした正方形 <ST-003>、隅丸方形（台形）<ST-001・002・004・006> の３つに分類可能である。天井形態はドーム形が主体で、家形が含まれる。ST-005は玄室平面が横長方形で、家形の棟木を浮き彫り状に表現されており、茂原・長生地区に主体的な「長生型横穴墓」[2)] の影響とみられる。重要なのは全体的にはほぼドーム状を呈する天井形態に家の壁部と屋根部との境を示す稜を有するもの <ST-002・003> が存在し、その稜にも強弱差がみられる点である。天井形がドーム形から家形へ変遷すると考えるよりは家形からの退化・省略形と捉える方が素直で自然な考え方であろう。同様の事例として大網白里町宮谷横穴群のST003・004のドーム形天井頂部に家の棟木を模した痕跡がみられるものが挙げられる。

羨道部　羨道天井部の遺存良好な横穴はないため明瞭ではないが、側壁上位から丸みを持ちながら天井部を形成するものと考えられる。壁面の工具痕は玄室と同様である。側壁に閉塞施設に関連すると考えられる縦方向の溝がST-004 ～ 006の３基から検出された。大網白里町瑞穂横穴群・宮谷横穴群でも同形状の溝状閉塞施設が確認されており羨道部の遺存が良好であればもう少し検出例が増加するものと思われ、同型式の横穴にとってはそれほど特殊な施設ではなかった可能性がある。

高壇式横穴の羨道部の特徴のひとつとして長羨道が挙げられるが、今回の調査対象の横穴でもST-003



第14図　東上総地域の古墳と横穴

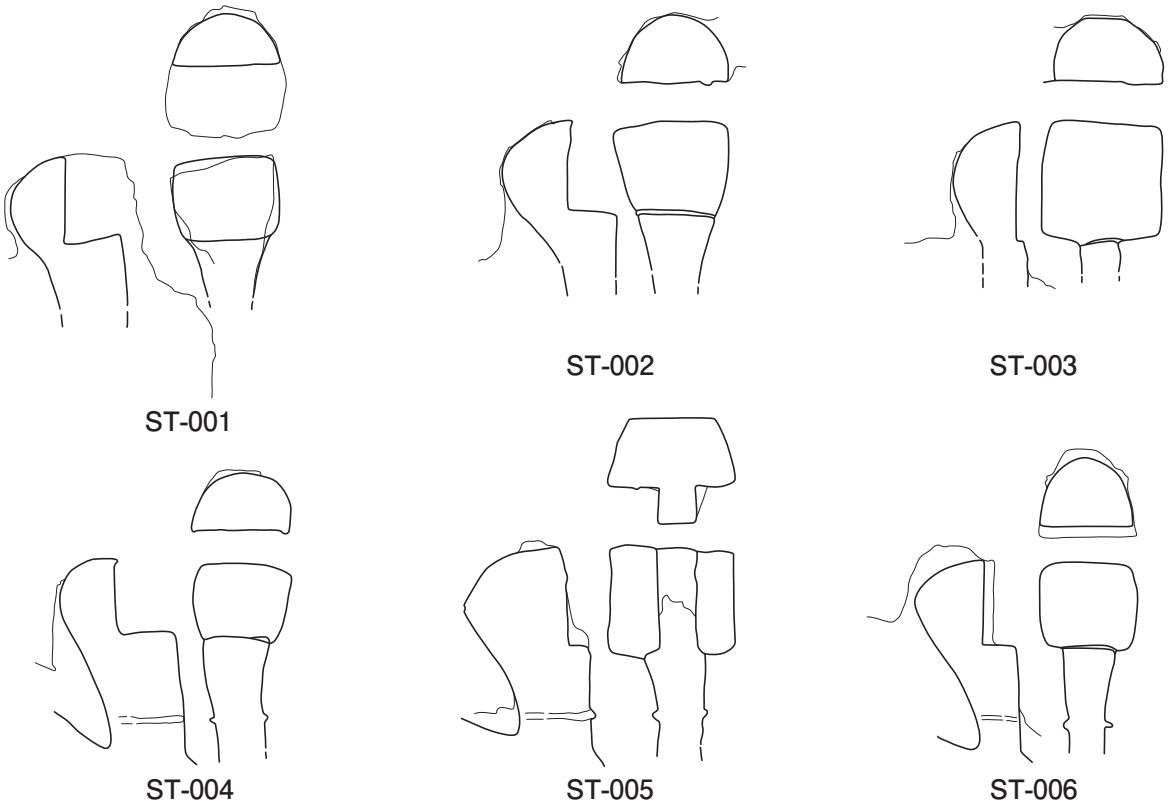
を除いてその傾向にあるといえる。ST-003は羨道幅も細く、玄室も低い位置にあることから他の横穴と大きく異なった型式と捉えられ、時期差も想定できる。「長生型横穴墓」の玄室が明瞭な袖部を有し、玄門部として玄室・羨道部の間に独立した空間を持つのに対して、本横穴群も含めて東金・大網白里地区にみられる高壇式横穴の玄門部は羨道部奥にほぼ組み込まれている形状をとる。このような玄門部の状況は閉塞施設が羨道部中位に位置することとも関連する可能性がある[3)]。

前庭部　調査対象横穴については羨道部手前部分がほとんど削平・崩落していたため、前庭部の構造についての情報はほとんど得ることができなかった。羨道部入口から傾斜変換している横穴が確認できるため、前庭部床面は水平ではなくやや傾斜のある部位が含まれていた可能性がある。また、前庭部の床面は岩盤層をベースとせずに、それぞれの横穴にたどり着けるよう斜面表土を整地した程度の奥行きのない道状であったとも想定できる。これは、閉塞施設が羨道部中位に位置していることで羨道部手前半分が前庭部的な空間を作り出していることに由来するのかもしれない。一方、「長生型横穴墓」ではしっかりとした前庭部（墓前域）が広く造り出され、床面も平らに近い状態で検出されており、対照的なあり方を示す。

規　模　調査した横穴は、ST-003を除いて玄室と羨道部の床面高低差の大きい高壇式の横穴構造をもつ。玉崎神社の社殿構築により、前庭部～羨道部の一部にかけて削平され、天井部も崩落が進み、遺存状況は全般的に不良であった。しかし、調査時の所見や電子平板による細かい工具痕・遺存状況の記録によって本来の横穴の形状を類推することが可能なため、積極的に横穴造営当初の平面・断面について復元図（第15図）を作成した。横穴により遺存状況が異なるため第6表でグラフ化した項目は玄室の規模と羨道奥幅、隔壁高の数値に絞った。玄室形態の異なるST-005と両袖・細羨道のST-003は横穴型式が異なるため一概に比較することは難しい。ST-001・002・004・006については玄室規模の小さいST-004の隔壁高が高く、隔壁高で数値のばらつきがあるが、平面形の数値が示すグラフは相似形に近く、同一型式内での変化と捉えられる。規模の大小よりも隔壁高の変化が時期差などを反映している可能性が指摘できる。

出土遺物　横穴はほとんど開口していたため出土した遺物は極めて少ない。鉄製品は鉄釘破片が中心であり、年代の想定が困難である。鉄鏃と考えられる個体も出土しているが、全て頸部等の小破片であり、鏃身部の出土がなくこちらからの想定も難しい。その中でST-002の玄室周溝内から出土した完形の土師器小型坏･須恵器長頸壺の示す年代観は極めて貴重となる。土師器坏は小型化が進んでおり、ミガキ調整、黒色処理、やや平底を意識した調整技法から考えて7世紀中葉前後のものと判断できる。周辺での類例としては集落出土資料ではあるが須恵器の伴出もある東金市久我台遺跡SI233住居跡出土品[4)]に近似する。一方、須恵器長頸壺は口縁形態や肩部が強く屈曲する特徴が、東海地方湖西産と考えられる同器種では年代が下る要素であり、遡っても7世紀末、恐らく8世紀初頭の年代が想定される[5)]。ST-002横穴の築造は7世紀中葉前後で、追葬で8世紀初頭まで継続して造営されていたと理解したい。

横穴の変遷　玄室の平面形から3分類することができたが、高壇式横穴の前段階を示す両袖・細羨道のST-003、玄室が丁寧な家形構造で、規模が大型のST-005が他の横穴に先行して築造されたと考えられる。年代の分かる遺物の出土がないが、この想定はST-003が支群のなかで中心に位置すること、ST-005が高い位置に築造される点からもある程度補強される。また、玄室天井形態の家形からドーム形への変遷でみると、屋根部の表現が形骸化していく点を素直に捉えるならば、より家形の表現がはっきりしているST-003･005、かなり玄室壁面の稜が弱く屋根部との境が曖昧になっているST-002、遺存が悪いが恐らくドーム形のST-001・004・006への流れが想定できる。ST-002の築造年代を7世紀中葉とすればドーム形の築

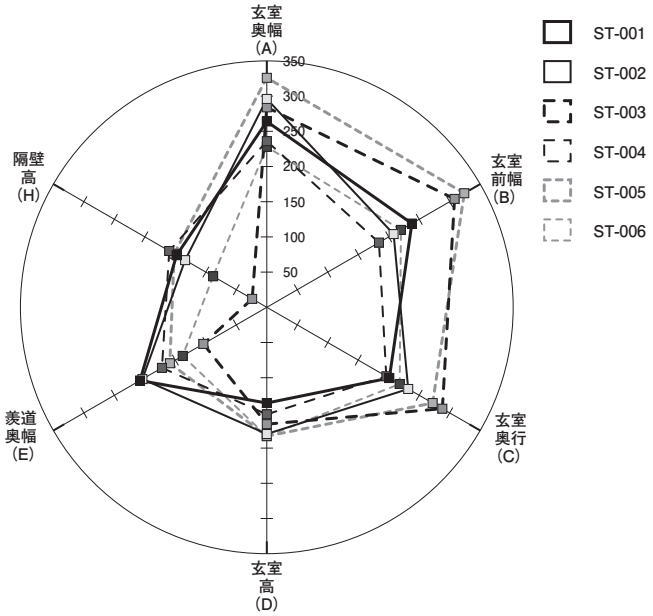


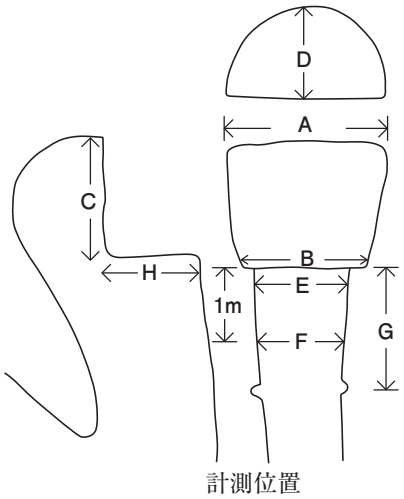
第 15 図　復元横穴平面・断面図（S=1/200）

第 6 表　横穴復元計測値とグラフ

（単位：cm）

	玄室 奥幅（A）	玄室 前幅（B）	玄室 奥行（C）	玄室 高（D）	羨道 奥幅（E）	羨道 中幅（F）	羨道 奥～閉塞長（G）	隔壁 高（H）
ST-001	264	238	201	136	208	136	－	148
ST-002	296	208	232	180	204	144	－	134
ST-003	284	308	288	166	104	96	－	24
ST-004	236	184	196	152	172	144	204	160
ST-005	326	324	272	183	159	130	152	152
ST-006	228	220	218	183	138	144	200	88





造が７世紀後半と推定できる。ドーム形の３基については規模に大きな差がなく、改変が多く推定した形状であり、年代の分かる遺物の出土もないため前後関係を明確にできない。しかし、それらの隔壁高には差があるため築造の時期差は確実にあったものと考えられる。

東上総地域の横穴の変遷について２地区に分けまとめたのが第 16 図である。とりあげた横穴は変遷の画期を示す形態を持ち、出土遺物に時期差のあるものを優先した[6)]。想定年代は出土遺物を基本に考えているため、時期による変化があるとされる基準尺度を主に利用した松本昌久・西原崇浩氏の挙げている成果と比べると年代はやや新しくなる傾向にある。築造当初と追葬遺物の区別のできる事例は横穴の形態の性質上多くなく、追葬も複数回にわたると考えられるため、良好な資料の追加により年代観も遡る可能性はある。２地区の主体となる横穴の変遷の方向性としてはほぼ一致する。６世紀後半に無高壇・両袖・細羨道の横穴が採用されるが７世紀台にはほとんど継続しない。本横穴 ST-003 はこの型式の流れで捉えられる。次にまず茂原・長生地区の「長生型横穴墓」が展開するが、東金・大網地区でこの時期に遡る遺物は現状では確認できない。その後、「長生型横穴墓」の影響を受けた家形を模した玄室形態からドーム形を主体としていき、小型化する。

以上、これらの成果は、東金地域は横穴が集中造営される地域と認識はされながらも、具体的な横穴型式については不明な部分の多い状況にあって貴重な資料といえる。本横穴群周辺で古墳時代中期から継続的に営まれている後期以降の集落についてはほとんど確認できていない。東金台・油井古塚原・小野山田・大網山田台・久我台遺跡の大規模発掘調査によって、横穴の展開する九十九里平野に面する台地丘陵先端部分からはやや離れるが、その台地の付け根にあたる台地平坦部においてほぼ一様に古墳時代後期６世紀後半以降から集落が開始される様相が明らかにされている。横穴の造墓主体を平野部に求める意見もあるが、東金・大網地区では台地上の集落との関係をまず考えたい。今後は、玄室アーチ形天井の高壇式横穴が展開する海匝地域や茨城県南部に点在する横穴との比較、さらには宮城県矢本横穴群で調査された玄室の高い横穴の系譜も含め、より広域に横穴の変遷や関連性について検討していくことが重要となる。

注）１．東上総地域の横穴の変遷については主に下記文献を参考にした。
1991 上野恵司・松本昌久「千葉県内の横穴墓群」『茨城県考古学協会シンポジウム 関東横穴墓遺跡検討会資料』
1993 松本昌久「東上総における横穴墓について」『多知波奈考古』創刊号 橘考古学会
2001 黒沢 崇「房総における高壇式横穴の展開」『日本考古学の基礎研究』茨城大学人文学部考古学研究室
2008 西原崇浩「千葉県横穴墓の受容と展開」『多知波奈の考古学 上野恵司先生追悼論集』

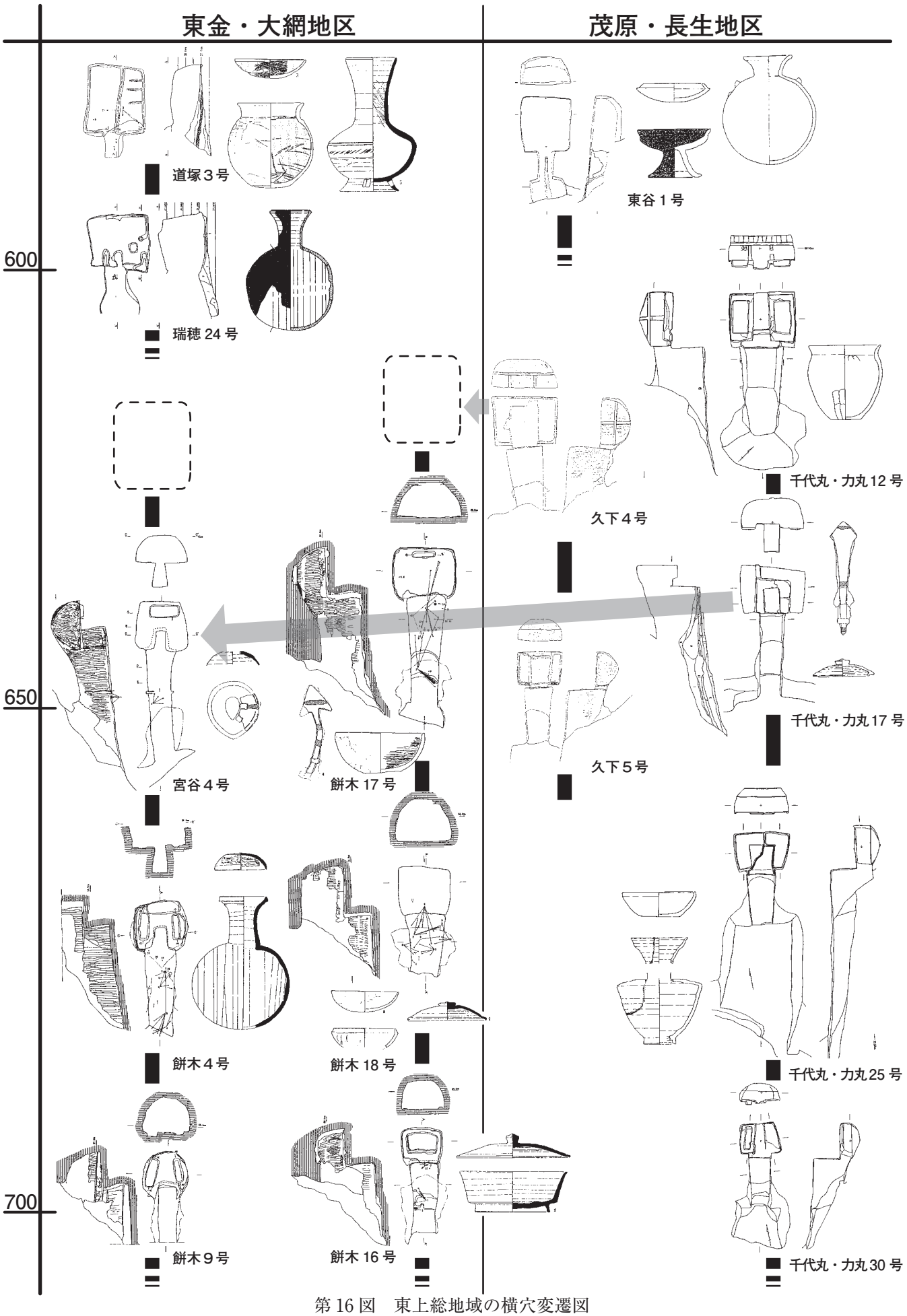
２．松本昌之は長生地域に主体的にみられる玄室平面両袖形、玄室断面寄棟平入り形・切妻平入り形を呈する高壇式横穴に対し「長生型横穴墓」と呼称している。1991『千代丸・力丸横穴墓群』（財）長生郡市文化財センター

３．「長生型横穴墓」が造営される茂原・長生地区では溝状の閉塞施設は確認されていない。

４．1988『東金市久我台遺跡―房総導水路建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書―』財団法人千葉県文化財センター

５．2000 鈴木敏則「古墳時代湖西窯編年の再構築にむけて」『須恵器生産の出現から消滅』東海土器研究会

６．第 16 図に使用した図は下記報告書による（縮尺：横穴 1/320・土器 1/10・鉄鏃 1/5）。新しい段階と想定される小型玄室の横穴では良好な出土遺物がなく、時代を下げるのではなく、前段階における階層差とも捉えることも可能ではある。
1982『東谷横穴群１号横穴墓発掘調査報告書』睦沢町教育委員会
1986『千葉県大網白里町 瑞穂横穴群』（財）山武郡南部地区文化財センター
1991『千代丸・力丸横穴墓群』（財）長生郡市文化財センター
1995『道塚横穴・ヤグラ群』（財）山武郡市文化財センター
1999『県道山田台大網白里線埋蔵文化財調査報告書２―大網白里町餅木横穴群―』（財）千葉県文化財センター
2002『大網白里町宮谷横穴群―地方特定道路整備埋蔵文化財調査報告書―』（財）千葉県文化財センター
2012『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書―茂原市久下横穴群―』（財）千葉県教育振興財団



第 16 図　東上総地域の横穴変遷図

写　真　図　版

遺跡周辺空中写真（S= 約 1/10,000）

図版２

横穴群遠景（南東から）

調査区南西側調査前（南から）

調査区北東側調査前

工事立会横穴２基（ST-007・008）

ST-007

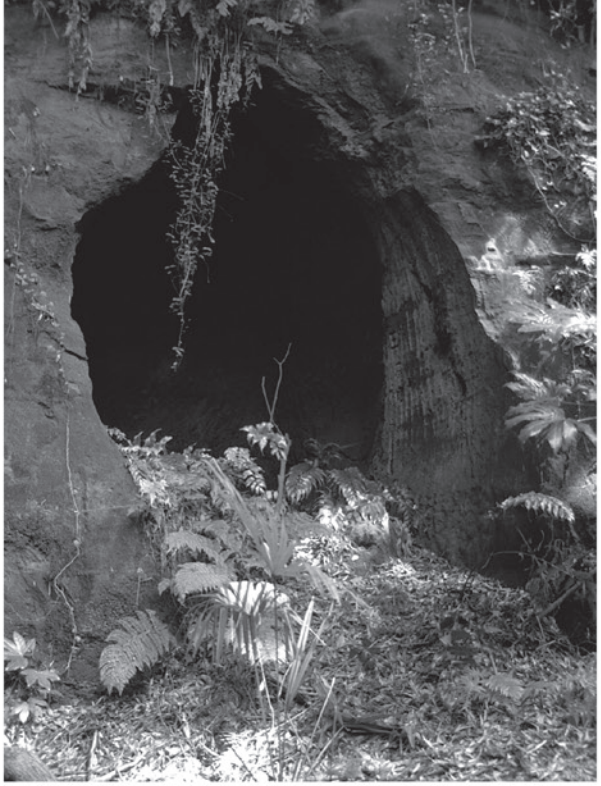
ST-008

ST-002・003 調査風景（南東から）

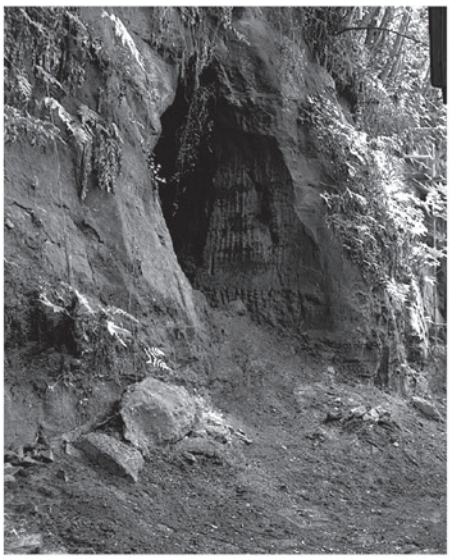
土フルイかけ作業風景

ST-001

図版 3



左：調査前風景
（南東から）
右：調査後全景



左：調査前
（南から）
右：玄室・羨道断面

左：玄室奥壁・左壁
右：玄室・羨道右壁

図版 4

ST-002（1）

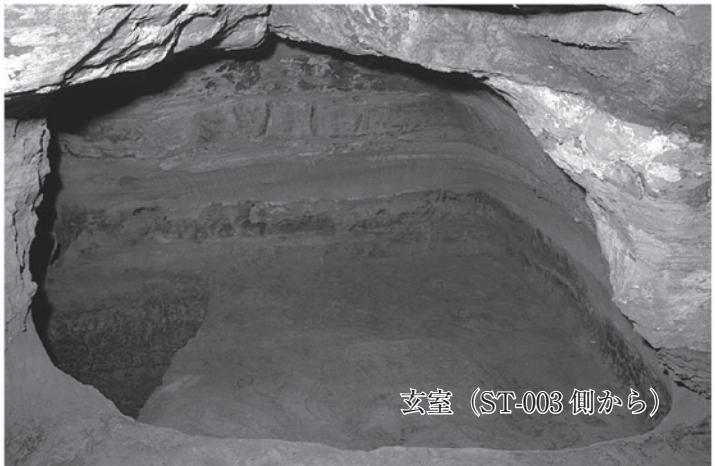
調査前全景（南東から）

調査後全景（下から）

調査後全景（正面から）

玄室・羨道断面

玄室天井部（羨道から）



玄室（ST-003 側から）

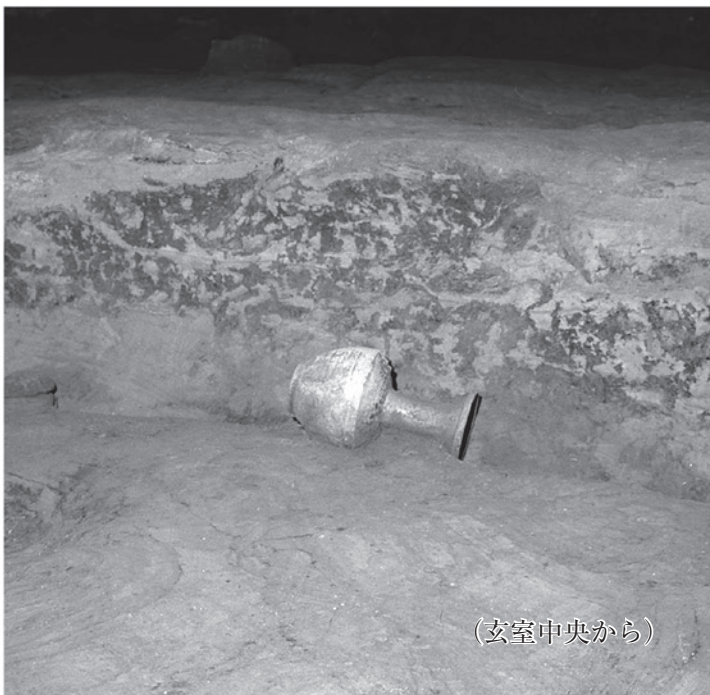
玄室から入口方向

電子平板測量作業（南東から）

羨道左壁

羨道右壁

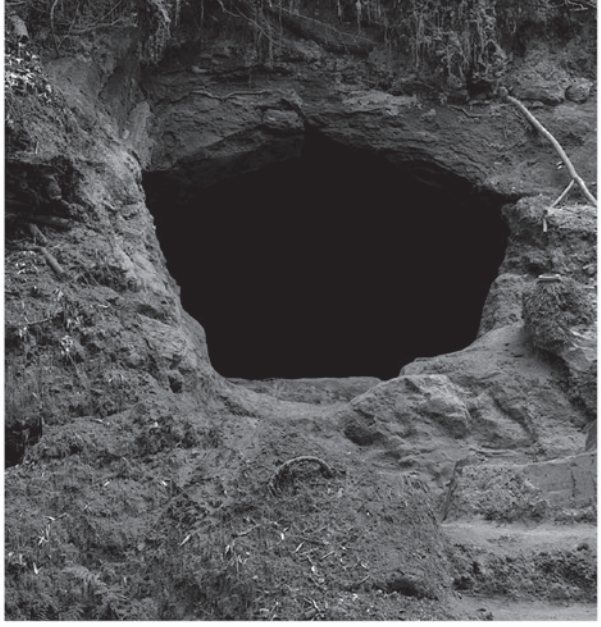
玄室遺物出土状況（羨道から）



（玄室中央から）

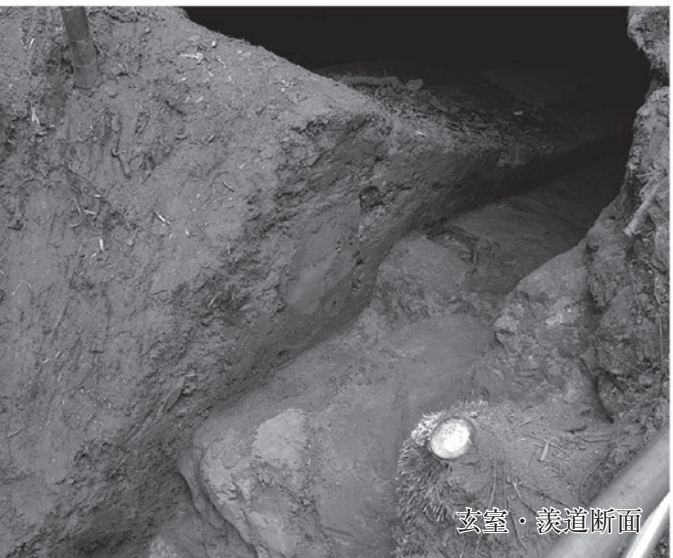
図版 6

ST-003（1）

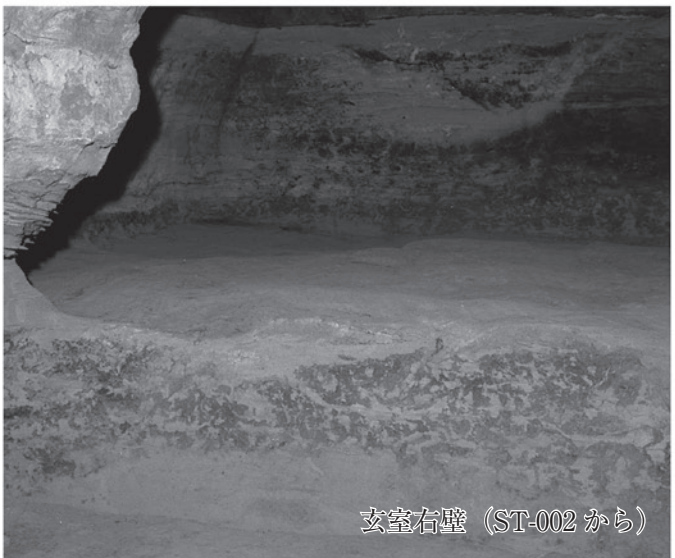


左：調査前全景
（南東から）
右：調査後全景

調査後全景（東から）



玄室・羨道断面

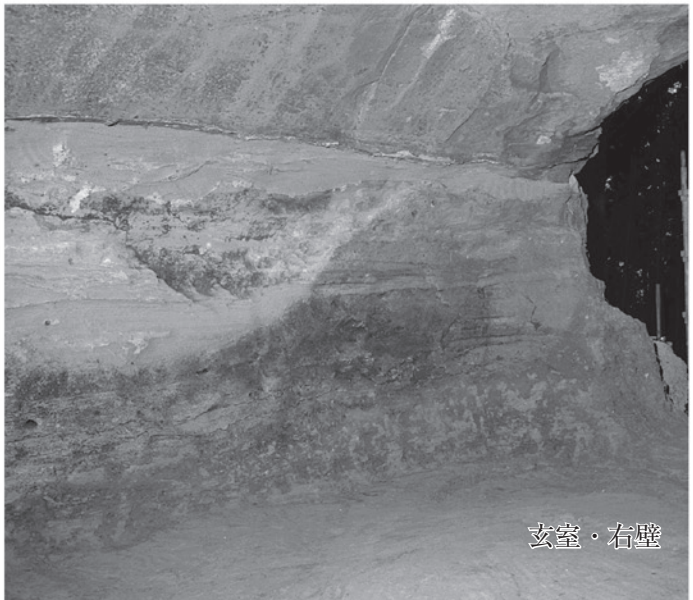


玄室右壁（ST-002 から）

玄室左壁（奥は ST-002）

玄室奥・右壁

玄室（羨道から）



玄室・右壁

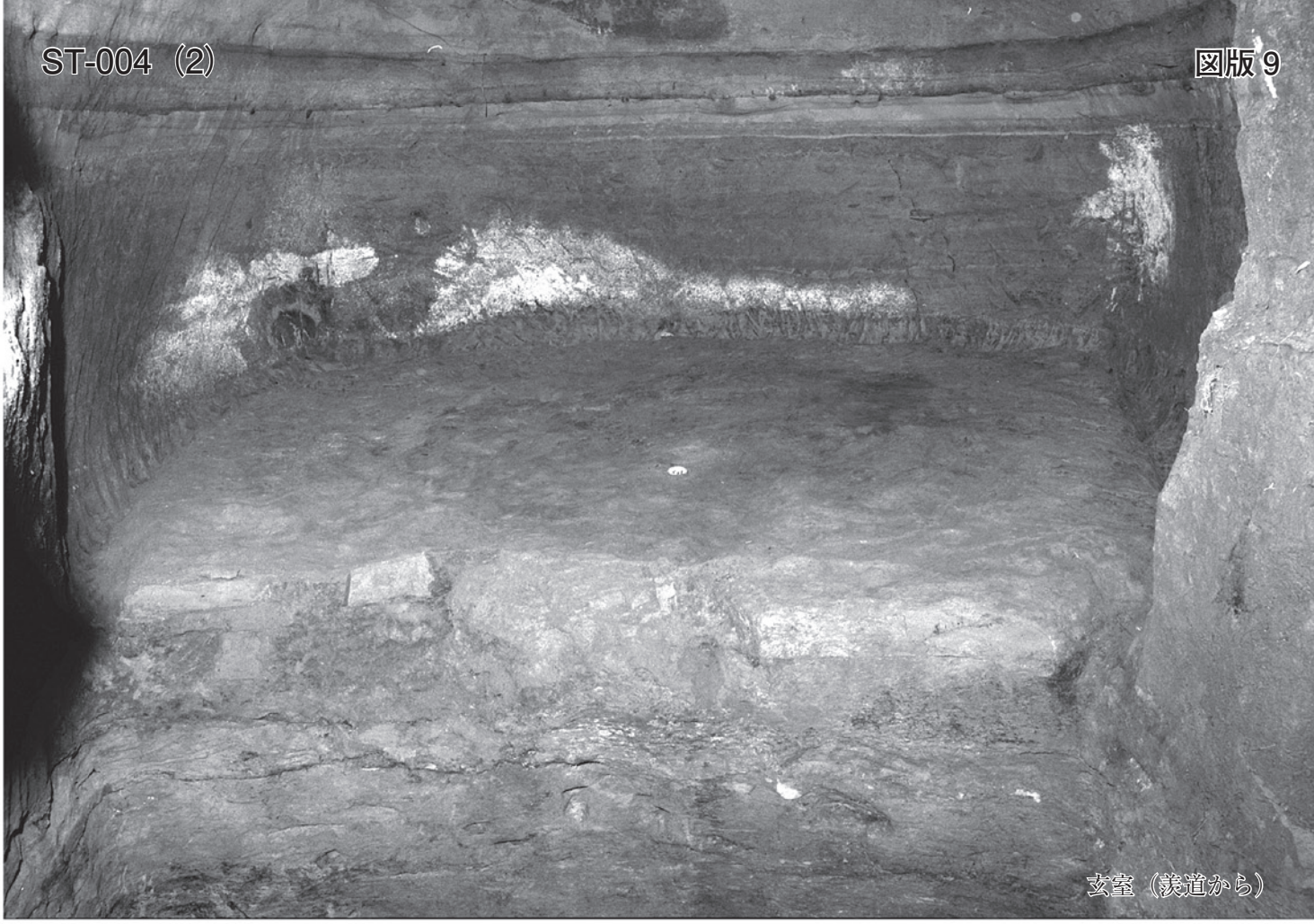
玄室奥壁

ST-004（1）

左：調査前全景
（南東から）
右：玄室・羨道断面

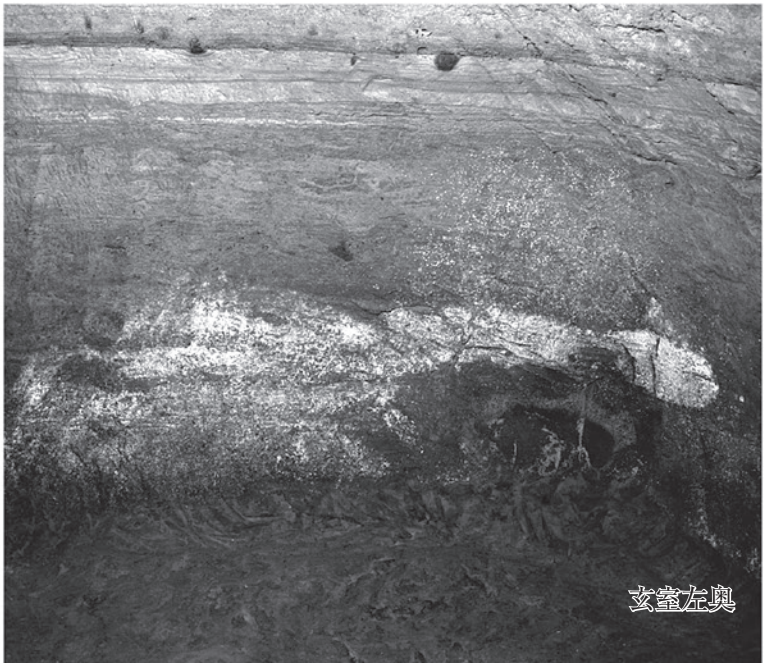
左：調査後全景
右：羨道奥
鉄器出土状況

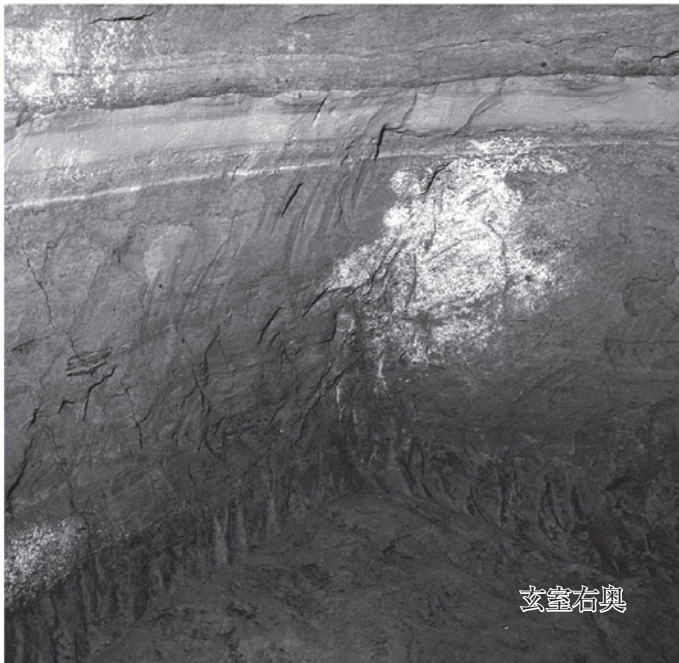
左：羨道左壁
右：羨道右壁


玄室（羨道から）

玄室左壁

玄室右壁


玄室左奥


玄室右奥

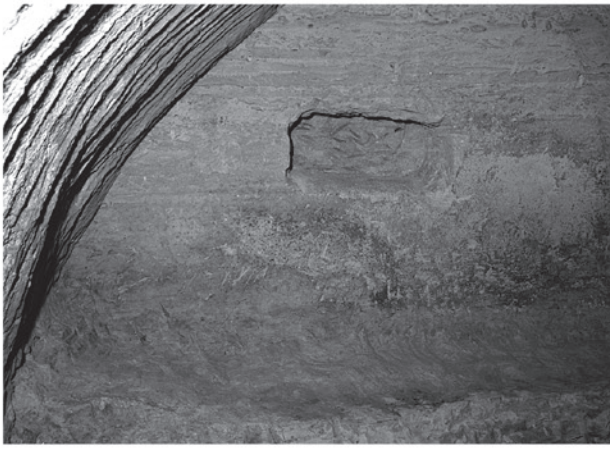
ST-005（1）

左：調査前全景
（南東から）
右：玄室羨道断面

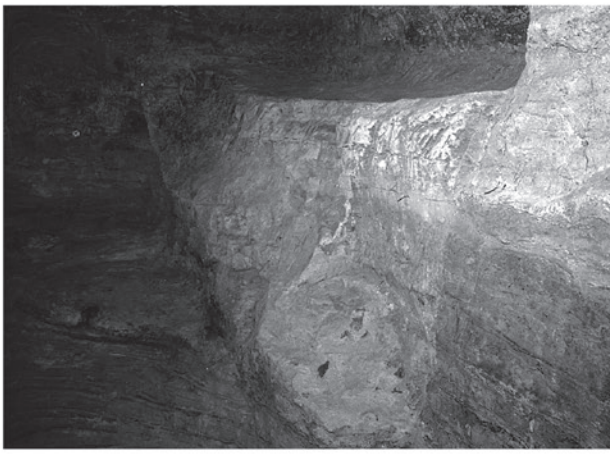
左：調査後全景
右：玄室から羨道方向

左：羨道左壁
右：羨道右壁

玄室（羨道から）



左：玄室左側上部
右：玄室右側上部



左：玄室左側下部
右：玄室右側下部

左：玄室中央下部
現代遺物出土
右：玄室中央下部
（羨道から）

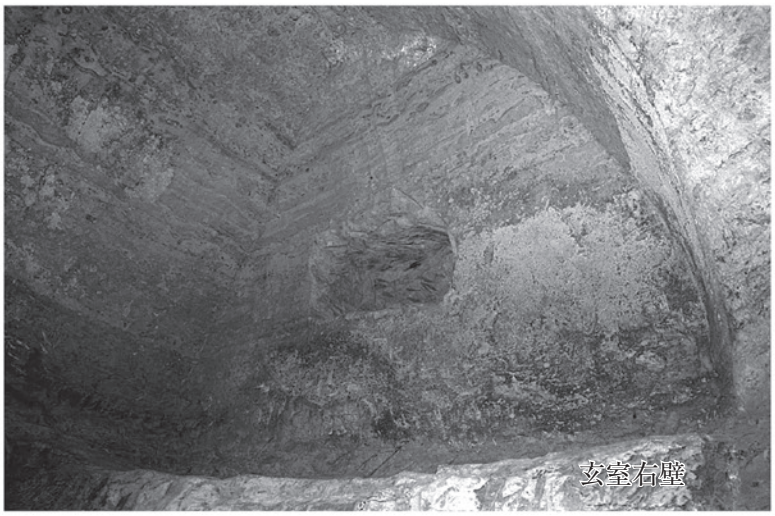
図版 12

ST-005（3）

玄室天井

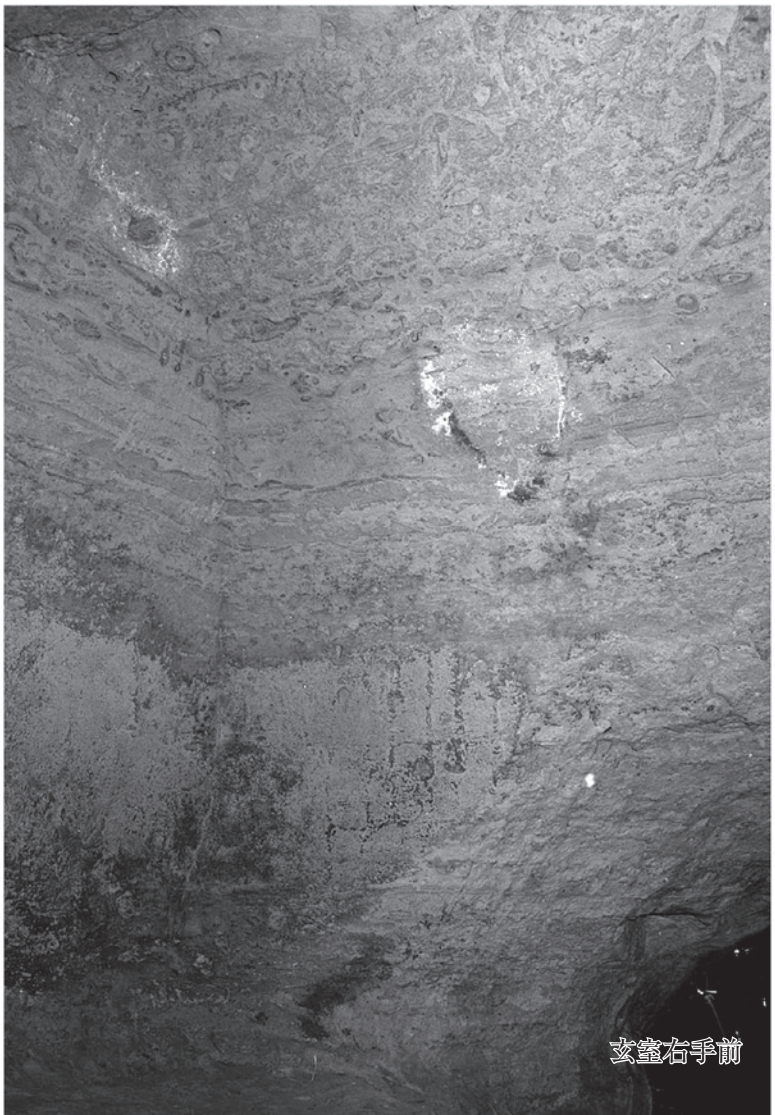
玄室入口側天井

玄室左壁

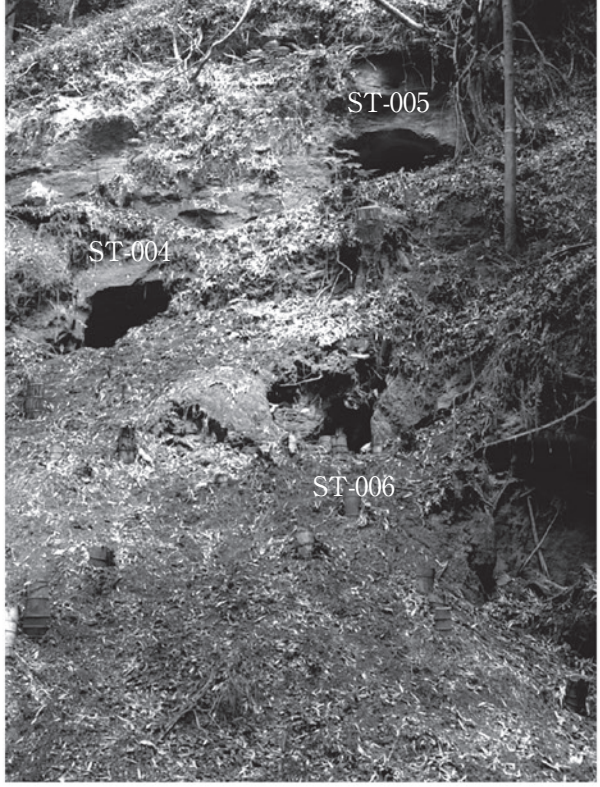


玄室右壁

玄室左手前



玄室右手前



左：ST-004～006
調査前全景
（南東から）

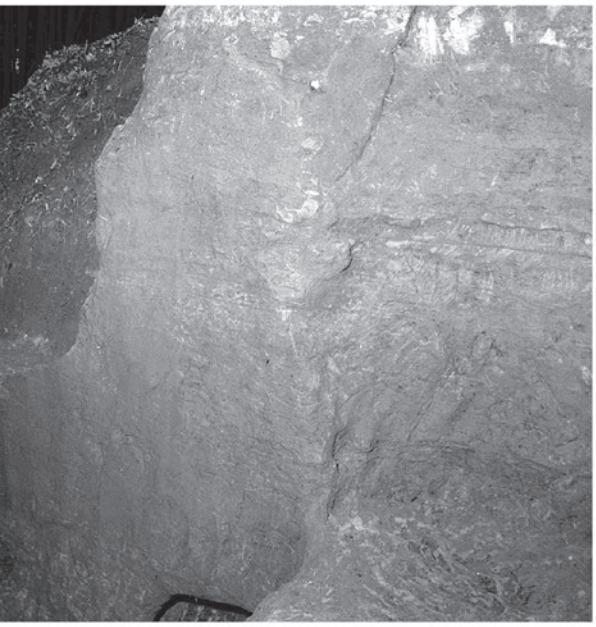
右：玄室・羨道断面

調査後全景
（南東から）

左：羨道左壁

右：羨道右壁

羨道奥
遺物出土状況

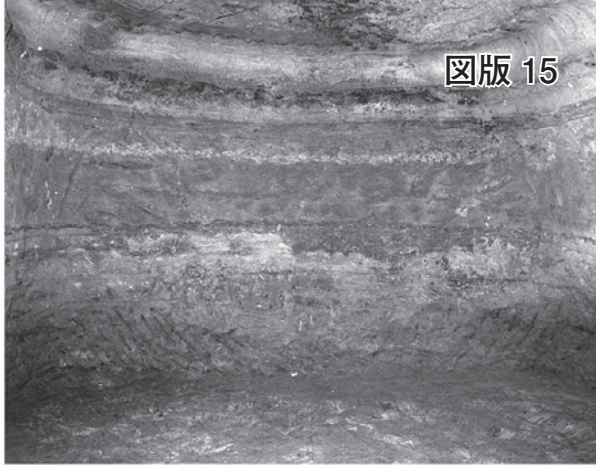


左：羨道左壁
（玄室から）

右：羨道右壁
（玄室から）

左：羨道左壁下
掘込

右：羨道床面
（玄室から）



左：玄室床面
（羨道から）
右：玄室奥壁

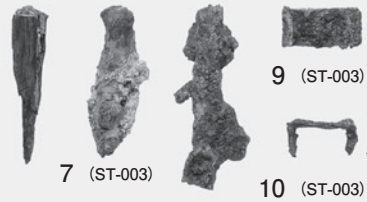
左：玄室左奥
右：玄室右奥

左：玄室左手前
右：玄室右手前

出　土　遺　物

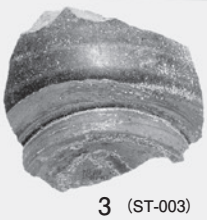
1（ST-002）

2（ST-002）



6（ST-003）　7（ST-003）　8（ST-003）　9（ST-003）　10（ST-003）　12（ST-004）　13（ST-004）　14（ST-004）

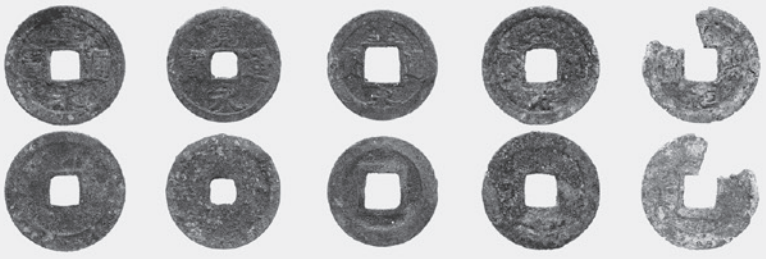
11（ST-003）



3（ST-003）

4（ST-003）

5（ST-003）



15（ST-003）　16（ST-003）　17（ST-004）　18（ST-005）　19（ST-006）

報告書抄録

ふりがな	とうがねし　たまさきじんじゃうらよこあなぐん
書名	東金市　玉崎神社裏横穴群
副書名	土砂災害防止委託埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第698集
編著者名	黒沢　崇
編集機関	公益財団法人　千葉県教育振興財団　文化財センター
所在地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809番地の2　TEL：043-424-4848
発行年月日	2013年2月28日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
玉崎神社裏横穴群（たまさきじんじゃうらよこあなぐん）	東金市田間（とうがねしたま）2214-6ほか	12213	028	35度34分09秒	140度22分03秒	20110704～20110926	969.32㎡（横穴6基）	田間急傾斜地土砂災害防止事業に伴う埋蔵文化財調査
				世界測地系 WGS84				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
玉崎神社裏横穴群	横穴	古墳時代	横穴6基	土師器・須恵器・鉄製品 近世陶器	7世紀中葉以降に横穴玄室天井形が、家形からドーム形への形態変遷していく方向性が捉えられ、周辺地域の横穴構造の変遷がより具体化した。

要約	古墳時代終末期の横穴6基を対象に発掘調査が実施された。周辺地域通有の高壇式構造の横穴を主体とするが、壇高さが比較的低い横穴が含まれる群構成である。玄室は比較的小型のものが多く、天井形態は家形とドーム形である。ドーム形の中にも家形の名残を有する横穴があり、家形からドーム形へ変化する過渡期の様相と捉えられる。遺物は開口していたため極めて少数であるが、完形の須恵器長頸壺と土師器坏、鉄製品では弓飾りである両頭飾鋲が出土した。土器類は7世紀中葉～8世紀前葉にかけての時期と考えられ、明確な年代根拠資料が少ない周辺の横穴群の変遷を考える上で貴重な資料である。危険が伴うため通常の発掘調査を実施できなかった2基についても工事立会を行った際の記録を併せて収録した。

千葉県教育振興財団調査報告第698集

東金市 玉崎神社裏横穴群

—土砂災害防止委託埋蔵文化財調査報告書—

平成25年2月28日発行

編　集　公益財団法人　千葉県教育振興財団
文化財センター

発　行　千葉県県土整備部
千葉市中央区市場町1－1

公益財団法人　千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の2

印　刷　株式会社　エリート情報社
成田市東和田415－10